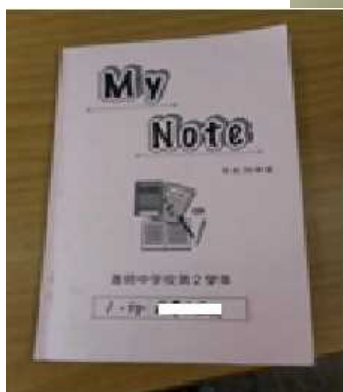


平成29年度
「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察

報告書集



〈大仙市の授業〉



〈福井市の家庭学習〉

福島県教育委員会

目 次

○ 「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察について		3
○ 報告書		
【福井県福井市】		
福井市立社北小学校 ^{やしろきた}	影 山 さゆり (三春町立沢石小学校)	4
	鈴 木 貴 之 (南会津町立田島第二小学校)	6
福井市立日新小学校 ^{につしん}	加 藤 彰 子 (白河市立信夫第一小学校)	8
福井市立進明中学校 ^{しんめい}	臼 井 智 弘 (福島市立松陵中学校)	10
	本 多 英 弥 (本宮市立本宮第一中学校)	13
	吉 田 由美子 (郡山市立御館中学校)	15
福井市立足羽中学校 ^{あすわ}	武 田 崇 宏 (石川町立石川中学校)	17
	山 崎 信 一 (矢吹町立矢吹中学校)	19
	佐 藤 盛 俊 (会津若松市立第五中学校)	25
【秋田県大仙市】		
大仙市立神岡小学校 ^{かみおか}	草 野 賢 (伊達市立堰本小学校)	27
	平 子 理 世 (喜多方市立第二小学校)	29
	遠 藤 桂 子 (南相馬市立高平小学校)	31
大仙市立平和中学校 ^{へいわ}	室 井 聡 (会津若松市立北会津中学校)	33
	進 藤 健 二 (南会津町立荒海中学校)	35
	寶 伸 一 (相馬市立中村第一中学校)	38
	中 田 仁 子 (いわき市立勿来第一中学校)	43
	赤 石 大 輔 (いわき市立江名中学校)	45

「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察について

1 目的

学力向上や教育課程に係る施策等について先進的な取組を行っている福井県福井市並びに秋田県大仙市の教育委員会と所属の学校を訪問し、各学校における算数・数学科を中心とした授業の進め方や校内研修の体制、家庭学習の取組等について視察し、本県の教育行政や各学校の取組に生かす。

2 期 日

平成29年6月26日（月）～6月30日（金）

3 視察先

【福井県福井市】

福井市教育委員会
福井市立社^{やしろきた}北小学校
福井市立日新小学校
福井市立進明中学校
福井市立^{あすわ}足羽中学校

【秋田県大仙市】

大仙市教育委員会
大仙市立神岡小学校
大仙市立平和中学校

4 訪問者

福島県教育庁義務教育課指導主事等 5名（福井市3名、大仙市2名）
福島県算数・数学科コアティーチャー17名（福井市9名、大仙市8名）

5 視察内容・日程

【6月26日（月）】

- ・移動
- ・教育委員会、視察校挨拶

【6月27日（火）～29日（木）】

- ・授業参観
- ・管理職、各主任等との懇談
- ・研究授業の実施

【6月30日（金）】

- ・授業参観
- ・移動

「あたりまえのことをあたりまえに」～福井視察を通して～

三春町立沢石小学校 影山 さゆり

1 視察校の概要（福井市立社北小学校）

創立140年を迎える歴史ある学校。児童数552名（21学級）、福井市の中では中規模。学区は、福井駅からバスで15分程度。近隣に大きな運動公園があり、来年度の国体のメインスタジアムになる。特色ある教育としては、25年度にコアティーチャー養成事業（算数）の指定を受ける。今年度は、語彙力（言葉の力）をテーマに校内研究をしており、国語科を中心に各教科に合わせて、語彙力をつけるための授業を展開している。また、平成23年度から県知事指定の弦楽クラブが発足され、放課後を中心に活動している。



2 視察の内容

【6月26日（月）】教頭先生と日程の打合せと学校概要説明と学校案内

○校舎内の様子

放課後の校舎を案内していただく。古い校舎にもかかわらず、清潔感にあふれている。掲示物も美しく掲示してある。算数（単位、換算、角度等）や百人一首（語彙力向上、かるた王国福井）の掲示が階段や壁などに掲示されていて、日頃の学習の様子や環境整備が整っていることが伺える。

【6月27日（火）】福井市教育委員会指導主事訪問日により授業参観と研究協議会に参加

○禅の心（永平寺から無言清掃）

前日に、教頭先生からぜひ、掃除の様子を見てほしいというので楽しみにしていた。トイレ、体育館、教室、時間いっぱい無言でひたすらぞうきんがけを続ける。ふらふらしたり、しゃべったりする児童がいない。教師も一緒に黙々と清掃していた。教頭先生曰く、「静」（無言清掃）と「動」（活発な意見交流など）のバランスが福井の教育の特徴とのこと。

○学習規律の徹底

全学年とおして、あいさつ、姿勢、話す・聴く態度、音読や発表の声の大きさ、歌声、文末表現など共通して徹底されている。どの学年、クラスもばらつきが見られない。

【6月28日（水）】研修主任、教頭先生、校長先生と懇談（福井県の取り組み、校内の取り組みについて）

○明確な目標のもと、福井県（地域、家庭も含め）が一体となって取り組んでいる印象をもった。校長先生のリーダーシップ、世代、学校の枠をこえた同僚性の高さが福井県の教育を支えている。

【6月29日（木）】自由参観と授業、中学校の音楽コンクール参観

○朝の学習タイムでは、時間が来ると校舎内がしんと静まりかえる。休み時間は、積極的に外で運動する児童が多い。（静と動のバランス）

○小中連携事業の一環で中学校の校内合唱コンクールに中学校区の小学校2校の6年生が参加。中学校区ごとに、幼保・小・中の連携が強い。

○TTで5年の算数の授業を行う（福島県の紹介と羽二重もちゲーム）。ゲーム（石取り）は法則を見つけることをテーマに展開した。まちがいなど気にせず、自分の考えをどんどん発表する。

【6月30日（金）】保幼小接続行事を参観

○中学校区の子ども園（3園）が来校。保幼小接続のため、福井市では、子ども園と小学校（1年生生活科中心）で教育課程の共通化を図っている。連携推進計画表は上の学校が作成する。保幼小接続→小学校。小中連携→中学校。1年生がリードしてスムーズにグループ活動をしていた。

3 視察の成果

(1) 授業について

○算数科の授業

授業のテンポが速く、1時間に課題を3問ほど解く。子どもとやりとりしながら、問題文を生活場面に結びつけて提示し、問題場面を把握させていた。習得→活用という流れで、課題は徐々に難易度が上がっていく感じ。1問目は教師主導で進め、見通しをもたせたり、やり方を理解させたりして本時のレディネスを整えている。自力解決では、いろいろな方法で考えるということが身につけていて、1つ目の考えで解決したら別の考えとたえず思考活動をしていた。練り上げでは、子どもたちの考えを図や表と結びつけたり、言葉の説明を式に表したり表現力・思考力を育む活動を設定していた。

○授業全体をとおして

・交流場面

算数科の授業に限らず、交流場面では、トリオ学習を取り入れている。自分が書いた考えを指し示したり付け足したりしながら話し合っている。低学年から、わからなくても、ここままでわかったなど何か意思表示を示すようにしているので、だまっている子どもや自力解決でボーっとしている子どもはいない。また、自力解決でわからなくても、トリオ学習でみんなが助けてくれる、みんなで解決していけるという思いがあり、安心して学習に取り組んでいる。

・表現力

教室に目的に合わせた文章の書き方や用語を掲示し、「書く」力が身につけている。1年生の生活科カードも行びつちり感想が書いてあって(6月末の時点で)驚いた。

○学力向上への取り組み

◎福井県の取り組み

【SASA(福井県学力調査)】

昭和26年から5年生4教科で実施。問題は3部構成。A問題(基本15分)、B問題(活用15分)、C問題(チャレンジ:実社会で生かせるような総合的な問題15分)。調査後は教育総合研究所が弱点を分析し、フォローアップシートを配付。

【算数WEB単元問題】

「定着確認シート」のようなもの。福島県と違うところは、1年生から単元ごとにダウンロードすること。総合教育研究所が学調やSASAの分析結果から弱点に絞った大問が一つと補充問題「やってみよう」でA43枚程。補充問題は、実態に応じて担任が自由に活用。現場の意見をもとに改善を重ね、使いやすいものになってきたとのこと。ネット上で県平均と学級平均を比較することができる。

【全国学力・学習状況調査への取り組み】

夏休み前に県の分析が終了し、分析結果、それに伴う手立てが市町村教育委員会、各学校へ到達され実践するという素早いPDCAサイクル。

(2) 研修について

小中連携により、中学校区ごとに話し合っ課題を洗い出し、それぞれの学校で現職のテーマとして取り組む。(社中学校区→中学校1校、小学校2校、子ども園、テーマは「語彙力の向上」)福井市の指導主事訪問(年2回)に合わせて研究授業を設ける。指導主事訪問日は学校公開日になっており、1日中授業公開。中学校区の先生(子ども園を含む)はもちろん、他校区の先生方も参観可能。校内の授業力向上のみならず、地域の学校全体の水準を引き上げる目的がある。また、校内の行事のほかに、課外活動などを精選していて、教師は放課後教材研究をする時間が確保されている。職員室でよく授業について語り合っている様子が見られた。毎日が校内研修だそうだ。

また、教科研究会や小教研の活動も活発で、木曜日は研修会ができるように福井市内特別時程を組んでいる。副教材やテストも作成している。さまざまなコミュニティが教員を取り込み、その中で互いに支え合い、鍛え合っている。

(3) 家庭学習

家庭学習は、学年×10分、平日は音読、国語、算数、自学、終末に日記的なもの。家庭学習の手引きを配付と福島県とさほど変わらないが、長期休業の宿題が多い。夏季休業に1回家庭訪問のついでに、宿題の進み具合もチェックする。宿題の提出率は90%以上と高い。家庭の教育力の高さに支えられている。忘れてきても、必ずやらせる。教師は、宿題にきちんと目をとおり、間違い直しまで確実にさせる。休み時間や放課後に提出物のチェックに励んでいる姿がみられた。

『『凡事徹底』～福井市立社北小学校を視察して～』

南会津町立田島第二小学校 鈴木貴之

1 視察校の概要（福井市立社北小学校）

児童数は 552 名（21 学級）。福井市のなかでは中規模。140 年の歴史があり、校舎は掃除が行き届いており清潔である。今年度からは、人権教育の推進事業の委託を受けている。学区の特色としては、近隣に大きな運動公園があり、福井国体のメイン会場になるとのこと。田畑が住宅地に変わり、新住民の流入がある地域である。特色としては、語彙力（言葉の力）をテーマに校内研究をしており、全クラス足並みをそろえて取り組んでいる。また、知事肝いりの弦楽クラブが放課後中心に活動している。

2 視察の内容

【6月26日（月）】 教頭先生と日程の打ち合わせと学校の特徴について紹介。学校案内。

- ・たてわり清掃。終始無言・両手直進の雑巾がけ（濡れ拭き）が徹底されている。体育館、トイレすべての場所で雑巾がけ。箒は雑巾がけの後。時間いっぱい取り組み、ふりかえりカード（一覧表と個票）に観点別に記入し教師がチェック。×をもらおうと指導。永平寺（禅寺）の影響がみられ、「人のために働くことの大事さ」と「体力向上」に効果を上げていると推測される。
- ・校内の掲示物は、指定を受けていたころの算数（単位換算、角度等）や百人一首（語彙力向上・かるた王国福井）の掲示物が多く見られる。日記・新聞は小さい文字で指定の枠を超えるほどの分量。字や絵も丁寧。特に低学年での「書くこと」のレベルの高さが目立つ。幼稚園・こども園でも文字の指導有。幼保小連携が緊密。
- ・教室環境は、椅子の足にテニスボールを付けてあったり（騒音対策）、全教室で工具箱を机上に出してあったり（帰る前に教師がチェック）、学習規律への意識の高さが見られる。教室内の掲示物は全クラスとも「言葉あつめ」の掲示物があり、すべての先生が研究テーマにそって責任をもって実践されていることがうかがえた。

【6月27日（火）】 指導主事訪問で提案授業と一般授業を参観。研究協議会に参加。

- ・学習規律が徹底（EX.両手で本をもって読む。椅子を入れる。発表者にヘソを向ける。音読はハリのある声。文末表現が丁寧。姿勢良。授業開始終わりの挨拶。）。
- ・校長先生自ら昇降口で靴そろえ。「はきものをそろえると心もそろえ」。水泳の着替えた後、上履きのそろえ方等、校舎を巡視してチェック。すぐに担任へ。
- ・授業は習得→活用の流れが多い。前半は教師主導で教え、後半子ども達が関わり合いながら問題を解くスタイル。教えて考えさせる。テンポが速く、活動量（思考場面）が多い。
- ・子ども達は常に前向きで、自分の考えを自分なりの図や言葉で表現しており、無答が見られない。自己肯定感や、やり抜く力が高いと思われる。
- ・自分の考えは、口頭での説明よりもホワイトボード、ワークシート、ノートに書かせる。

【6月28日（水）】 研究主任、校長先生、教頭先生より話を伺う。

- ・「計算チャレンジ」の取組。週一回算数プリント（解答速度に応じて金銀銅、進級制）。基礎計算力向上に効果。目標を立てて取り組んでいる子が多い。
- ・福井独自の小教研作成の副読本（「算数文章題」「理科ワーク」）の紹介。活用率高い。
- ・算数 WEB 単元問題（教育研究所）への取組。単元ごとにダウンロード。苦手なところに絞って大問が一つ。補充問題「やってみよう」もあり。現場の意見をもとに改善し使いやすいものになってきた。定着確認シートと相似しているが、問題はより焦点化されている。
- ・SASA（県学力テスト 5 年生 4 教科）の説明。A 問題（基本 15 分）B 問題（活用 15 分）C 問題（チャレンジ：実社会で生かせるような総合的な問題 15 分）過去問を一度やるが、

徹底した対策をするわけではない。教育研究所が弱点を分析、フォローアップ有。NRT等の年度末のテストはない。クラス替えのために CRT で調査するのみ。

- ・指導主事訪問は事実上の学校公開日。他校（中学校、近隣小学校、幼稚園）から教員が自由に参加。福井型18年教育保幼⇄小中⇄高の連携。幼児教育センターを全国に先駆けて設置。教研集会（組合）、小教研、教育総合研究所等、多様なコミュニティが教員を取り込み、その中で互いに支え合い、教え合い、鍛え合っているという。

【6月29日（木）】 自由参観と授業展開。中学校の音楽コンクールに参加。

- ・TTでの授業展開（福島で紹介、羽二重もち取りゲーム）。ゲーム（石取り）は法則を見つけることをテーマに展開。「法則通りでなくても勝てる」という自分の考え・解法に自信を持っている子が多く見られた。授業後の感想文にも「今度は負けない」「またやろう」等、前向き発言が目立つ。感想文も短い時間だが分量多く、丁寧。書けない子いない。
- ・学担は、朝、大休み、昼に宿題チェックやプリント直し、再テストを個別指導している。
- ・一人一台ノート PC があり、授業で ICT を活用したり、教室で事務仕事をしたりしている。
- ・市の合唱音楽祭の曲を中学校でも。音楽祭は競争激化を防ぐためにも賞は設けていない。

【6月30日（金）】 保幼少接続行事を参観。

- ・特別支援が必要な子が見られない。一年生がリードしてグループ活動。事前指導がしっかりしており、混乱なく楽しい活動となっていた。接続のために教育課程の共通化が3園と図られていた。
- ・業間休み（大休み）は全員外遊び。昼は図書室も可。日常に体力向上のしかけ。

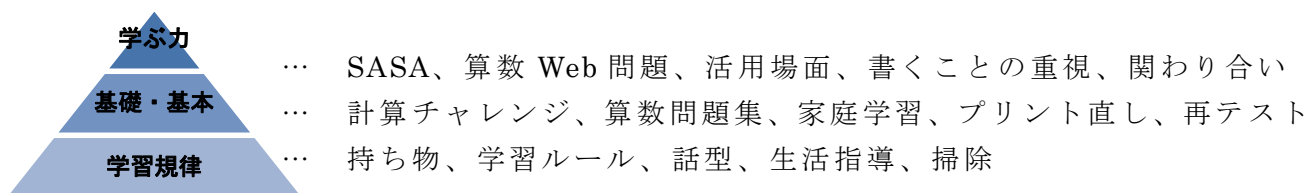
3 視察の成果

あたりまえのことをあたりまえにしようとする「凡事徹底」の意識が高く、子ども達に向き合うために行事・課外活動が精選されている。また、縦にも横にも教師間のつながりが強く、同僚性が高いことが特徴的であるように思われる。

（1）算数・数学科の授業について

【学力向上のための3層徹底ピラミッド】

福島と内容・量は類似しているが、「どの子にもやらせる」という徹底具合が違う。そのためにも、行事・課外活動、学級事務の合理化が図られている。



（2）校内研修について

【同僚性～学び合いつなげる教師集団～】

研究協議会は全体会（自評）→グループ協議→全体会（発表）の流れ。活発な議論で話さない教師はいない。「テーマを基に必ず実践→自分の実践を紹介→これからどうするか」という好循環の話し合い。学年主任を中心にチームワークで仕事をする中で若手が育つ。

（3）家庭学習について

【どの子も宿題は必ずやり切らせる】

宿題は学年×10分。平日は音読、国語、算数、自学。週末は作文有。自学は取り組み方を学年ごとに設定。夏・冬休みの課題が多い（問題集2冊）。提出率は高い。忘れた子は休み時間や放課後に必ずやらせる。夏休み中、全家庭訪問して丸付けをする学年もある。登校日までに終わっていない子は夏休み中登校させる。共働き率が高いため祖父母がサポート。家庭の協力が大きい。

「毎日当たり前のことの積み重ね」

白河市立信夫第一小学校 加藤 彰子

1 視察校の概要

昭和51年開校（当時391名 12学級）。福井市で43番目の学校。過密化解消のため開校。現在279名（11学級→2年生のみ1学級）

藤島中学校区（小学校3校）にある。学区内に、福井大学附属中学校、福井県立商業高校、私立啓新高校（進学校）などがあり、子どもたちが早くから目標にすることができる。

2 視察の内容

【6月26日（月）】

校長先生と教頭先生との打ち合わせ，校舎内見学

【6月27日（火）】

朝の活動（ミニ作文タイム）参観，校長先生と懇談（学校の概要等）

授業参観（2-1国語，3-1算数，5-2算数，6-2算数），

教頭先生と懇談（福井県学力調査SASAについて）給食・掃除の様子の見学，

委員会活動見学，体育主任と懇談（教科担任について）

【6月28日（水）】

全校集会，教頭先生と懇談（福井県の学校の特徴等について）

授業参観（5-1算数，1-1国語，1-2算数，4-1総合，4-2算数）

1年担任と懇談（家庭学習・学習規範について），4年担任と懇談（家庭学習について）

【6月29日（木）】

朝の会（スピーチの様子）

授業参観（5-2算数，3-2算数，6-1算数，1-1算数，4-2図工）

研修主任と懇談（研究内容・学力向上の取組等について）

【6月30日（金）】指導主事学校訪問（I）

授業参観（3-2総合・外国語活動，4-1社会），研究に関する懇談に参加

3 視察の成果

(1) 算数の授業について

○ 実物投影機を各クラスに1台配当しており，課題提示や話し合い活動，振り返り等に活用している。

○ 話す活動を必ず入れる。

→一人の児童が発表したあと，「付け足します」「違います」「簡単にいうと」など自分の考えをつな

げようとする姿が見られた。はじめは先生がつなげる活動を行ってきたが，友達の発表を聞いて自分の考えを伝える活動を児童間で行うことができている。

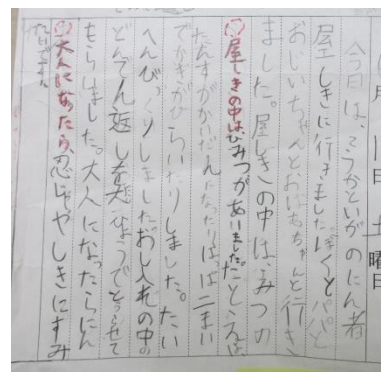
→考え方や方法を共有したあと，隣同士，グループ等で一人一人が話す活動を取り入れている。

→友達の発表のいいところから話形を広めている学級もある。

→自分の考えと比較して聞く態度が育っている。



- 書く活動を入れる。
 - 振り返る活動の実施。学習を振り返り、まとめや自分の考えを書く時間を設けるようにしている。
 - 書いたものは、なるべくその日のうちに添削し、学年の実態に応じて訂正させる。(写真は2年生の国語の作文だが、低学年では国語だけでなく算数でもこのような積み重ねを行っている。)

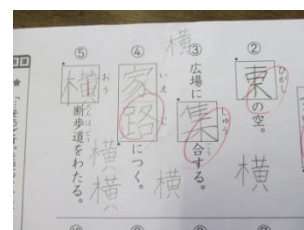


(2) 校内研修・学力向上の取り組みについて

- 校内研修について
 - ・ 重点実施内容（例えば、計算の見積もりをする、ローマ字を4学年以上でも繰り返し取り組むなど）を学期始めに確認し、確実にやっているか学期ごとに評価する。取り組み状況や実施してみたの改善点等については、放課後の職員室での先生方の話の中で意見交換が行われ、工夫・改善しながら取り組まれている。
 - ・ 必ず話す活動・書く活動を取り入れるようにしている。
- ミニ作文タイムについて
 - ・ 毎月1回、朝の学習の時間に行っている。(書く時間10分、放送で一斉に実施)
 - ・ 年間テーマを決め、時間内に書く。字数・形式等については担任裁量。
 - ・ 書いた後、友達と読み合ったりお昼の放送で発表したりする。
 - ・ 添削して、完璧なものに仕上がるまで直しを繰り返す。
- 朝の会のスピーチについて
 - ・ テーマを決め、スピーチを行う。
 - ・ 発表者に対して、感想を言ってから質問する。質問の回答に対しても質問した児童がコメントを返すことを意識的に行っている。
 - 学校で徹底して行うため、教員の実施状況の評価をとる(8割実施できている)。
- 現職教育について
 - ・ 全体での会議は年に1回。共通理解に関しては、年度始めに行い、その後は放課後の会話の中で行われている。

(3) 家庭学習について

- 毎日必ず、「音読」「漢字」「算数」は出すようにしている。内容は担任裁量だが、どの学級も量は多く出している。
- 先生方は朝の時間を利用して、宿題をチェックし、採点してなるべく早く返す。児童は返されたら、間違えたところをその日のうちに直す。直しは徹底して行う。
- 家庭の協力も得られているため、提出率は100%。低学年のころから、習慣化され、徹底しているため、高学年になっても当たり前になっている。
- 自主学習にも積極的に取り組めるように、教室の側面に学習コーナーを設け、児童のノートのコピーを掲示するなどして活用している。



「先進県視察（福井県）を終えて」

福島市立松陵中学校 氏名 白井 智弘

1 視察校の概要

視 察 校 福井市立進明中学校

学校規模 1年生4クラス，2年生5クラス，3年生4クラス，特別支援1クラス
計 381人

2 視察の内容

【6月26日（月）】

学校訪問（研究協議会から参加）

【6月27日（火）】

数学科授業見学

【6月28日（水）】

校長講話

数学科授業見学

【6月29日（木）】

中教研についての講話（明道中学校）

理科授業見学

【6月30日（金）】

英語科教科部会参加

（ALTとの打ち合わせ，各学年授業確認，
夏休みの課題確認，夏休みの学習会確認など）

3 視察の成果

（1）数学科の授業について

○全学年タテ持ちで持っている。

- ・教諭A（1年担任）→1年2クラス，2年1クラス，3年1クラス
- ・教諭B（2年担任）→1年1クラス，2年2クラス，3年1クラス
- ・教諭C（3年副担任）→1年1クラス，2年2クラス，3年2クラス

→タテ持ちは，授業の進度，補充プリント等，定期テスト，授業の進め方（教材研究を含む）が教科部会で共通な課題になるため，教員の授業力向上につながると考えられている。

※実際に数学部会は見ることができなかったが，英語部会に参加。その内容は，

1. ALTの先生と授業について全学年で確認
2. 夏休み課題の確認および検討
3. 授業の進度および具体的な進め方の確認（1学期中に終わらせたい単元（節）や文化祭に向けての展示物の確認も行った）
4. ドリルコンテストのやり方の確認
5. 夏休みの学習会について確認およびその協力要請
6. 英検の2次試験の練習の確認

など多くのことを話し合っていた。その話し合っている様子が，研究協議会同様にどの教員も同じ立場で何でも話し合える雰囲気であった。

○授業について

・板書の仕方など統一されたものは特になく、自由に感じた。授業のどの場面（導入、展開、終末）でも生徒の考えを確認したり、発表したりする時間を多く設定していた。（右の写真は、自分の考えと同じ人を3人見つけて、見つけたら先生に報告している場面。他にも、同じ部活動で意見を確かめあったり、自分の考えと違う人を見つけたら、前時の既習事項を自分の言葉で先生に言ったりする場面があった。）



（2）校内研修について

○全教員が毎年1人2回の公開授業を行っている。教科や学年の枠を超えたグループで研究を推進している。生徒の目線に沿って研究を進める上でこのグループ編成が有効であると考えているようだった。研究協議会では、若い教員がわからないことや疑問に思ったことを率先して発表していて、非常に活気あふれる、笑い声が絶えない協議会で、今までに見たことがないものであった。

（3）家庭学習について

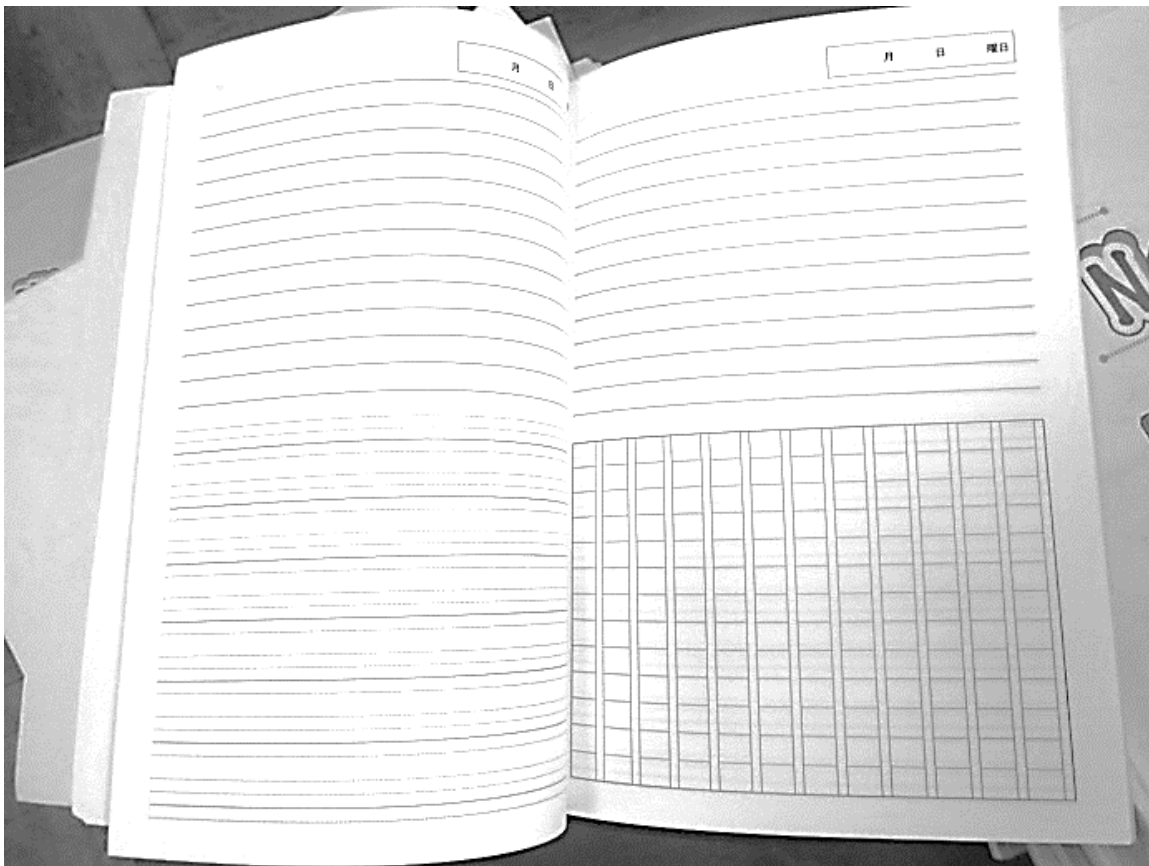
○学年課題＋教科課題が毎日出されている。

- ・学年課題の中に自主学習（マイノート）がある。ただし、1学年と3学年は使用していない。1学年は、教科課題のみ。（教科課題が多いため、採用しなかったようである）3学年は受験対策用テキストを使用している。家庭学習は、ほぼ全員が毎日取り組んでいる状況である。（別添の写真がマイノート。1ページを上下半分にして、大学ノートタイプ、下が英語のノートタイプと作文用紙タイプに分かれている。）
- ・1学年では、今後、教科課題に対して、適正な量とその1つ1つの教科課題に要する設定時間を提示することで、生徒にわかりやすく、1日の家庭学習のスタイルを明示していく方向である。

（4）その他

○中教研について

- ・全員が参加している。その中で、数学部会は、4つの委員会（数と式データの活用委員会、関数委員会、図形委員会、授業と評価委員会）に分かれる。1つの委員会は約20名程度である。基本的には、4つの委員会それぞれで授業研究会（秋）を行っている。月1回程度会議が行われる。（主に指導案検討）その予算は県費扱いにしている。完成した指導案は、各学校に配布され、同指導案で授業を実践している。また、全学年において年間指導計画も作成され、その中には各単元における評価基準表も作成されている。
- ・それぞれの委員会で問題集を作成し、各学校に配布している。（1次関数や活用力養成問題集（B問題向け）下写真は活用問題集）



6月23日 金

社会

1603年、奥平昌高より征夷大将軍に任命され、江戸(東京都)に幕府を開きし事。江戸幕府は、260年余り日本に戦乱のない平和な時代を作り上げた。この時代を江戸時代と呼ぶ。寛政11、1614、1615年の二度にわたる大坂の陣で豊臣氏を打ち倒し、幕府の権力を固めた。幕府の直轄の支配地(領地)は約400万石で、幕臣の領地を合算せし、全国の高約300万石の約2/3を占めた。江戸時代の大名家、将軍の所以上領地を領する大名を指し、幕の領地や御用、御用金を藩といふ。

interview interview interview interview
 1.09.20-95
 whole whole whole whole whole whole
 新聞
 journalist journalist journalist journalist
 ジャーナリスト新聞
 forget forget forget forget forget forget
 忘れ
 customer customer customer customer
 客
 smile smile smile smile smile smile smile
 笑顔
 another another another another another
 別の、別の

6月23日 金

数学

数式P52

$0x + 0.7x - 0.2y = 1$ (2) $0.4x - 0.1y = -2$
 $0.2x + x - 2y = 10$ $1.3x + y = -8$ $0.1x$
 $1.3x - 2y = 10$ $1.4x - y = -20$
 $-1 \quad x - 2y = -2$ +) $1.3x + y = -8$
 $2x = 12$ $1.4x = -28$
 $x = 6$ $1.4x = -28$
 $-6.2y = -2$ $-12 + y = -8$
 $-2.2y = -2.6$ $y = -8 + 12$
 $-2.2y = -8$ $y = 4$
 $y = 4$ $(x, y) = (6, 4)$
 $(x, y) = (6, 4)$

本	詳	狙	北	冬	従	傍	突	強	強	強	強
探	し	う	極	眠	う	て	然	烈	烈	烈	烈
水	い	狙	園	冬	従	る	然	然	然	然	然
解	詳	う	極	眠	従	傍	突	突	突	突	突
水	し	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然
解	い	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然
水	詳	狙	極	冬	従	傍	然	然	然	然	然
解	し	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然
水	い	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然
解	詳	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然
水	し	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然
解	い	狙	園	冬	従	傍	然	然	然	然	然

「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察報告書

本宮市立本宮第一中学校 本多 英弥

1 視察校の概要

(1) 視察校 福井市立進明中学校 (〒 910-0003 福井県福井市松本1丁目10番1号)

(2) 沿革, 学校規模, 学区の特徴 等

昭和22年, 福井市第四中学校として創立。昭和24年に校名を進明中学校に変更。

現在の生徒数は, 1学年が128名(4クラス), 2学年が146名(5クラス), 3学年が107名(4クラス)で, 職員数はカウンセラー等も含め37名である。

市の中心部に近く, 昔からの住宅地で生徒数も多い。以前は生徒指導面で苦勞しており, いわゆる「荒れた学校」の1つであったようだが, 小中学校の連携や地域への開かれた学校づくりなどにより, 現在は大変落ち着いた雰囲気教育活動が行われている。

(3) 特色ある教育

「笑顔と信頼」をめざし, 「教えるプロ」としての授業づくりの工夫, 互いに認め合える場の設定, 「人前力」・「対話力」の育成, 地域とのつながりの充実を実践している。特に学力向上には落ち着いた学校生活が不可欠であることから, 当たり前のことを当たり前でできる生徒の育成に力を入れ, 成果をあげている。

2 視察の内容

【6月26日(月)】 ※要請訪問

- ・研究協議(全体協議→グループ協議→全体協議)参観

【6月27日(火)】

- ・校長より沿革や学校経営方針, 実態等の講話
- ・授業参観(2年, 3年)
- ・研究推進委員会に参加

【6月28日(水)】

- ・朝の時間(8:05 ~ 8:25)の見学
- ・授業参観(1年, 2年)
- ・校長より中教研(英語科)の主な取り組みについて講話
- ・数学科教諭との対話(学力向上への取り組み等)

【6月29日(木)】

- ・明道中学校訪問→明道中学校長(中教研数学科)の講話と学校見学
- ・授業参観(1年理科)

【6月30日(金)】 ※午後 合唱コンクール

- ・授業参観(2年, 3年)
- ・教科部会(英語科)参加



3 視察の成果

(1) 数学科の授業について

①授業

授業において, 生徒と教師との対話から始まり, 生徒同士の対話を取り入れ, 説明をさせたり(人前力), 課題解決の方法を確認させたり(対話力)して, 伝え合い活動が充実していた。

板書は, 生徒の思考を補助するものであり, ノートをきれいに書き取らせるものではないという考えから, 文字や図は大きく, 授業1時間の流れが残るものではなかった。



②「タテ持ち授業」

4～5クラスを3人の数学教師で持つため、担当学年を2～3クラス、他学年を1クラスずつ持つことになる。それぞれの教師で少し進め方が違っていたのは気になるが、教科会で進度を合わせたり、指導内容について確認したりしており、それが教材研究にもつながっているように感じた。「タテ持ち」のよさは、一人の先生が1年から3年まで授業をするので、系統性を意識した教材研究が毎年できて、指導がぶれないことである。反面、1年から3年までクラス替えを行うので、場合によっては3年間違う先生に習う生徒が出てくる。これに関しては普段から全教師が全生徒を指導している意識を持つことで解消しているという。

③生徒の様子

生徒と教師の対話の場面では福島県の状況と差はないが、生徒同士の対話の場面では意欲的な話し合い活動が見られ、自分の考えを言語を通して説明することができている。その際、数学の言語を積極的に用いて説明しようとしているのが印象的だった。

(2) 研修について

①研究協議会の様子

視察の1日目に学校訪問があり、午後の提案授業後の研究協議会に参加させていただいた。全体協議では提案授業（英語科）について、事後研究会が行われ、活発な意見交換がなされていた。特に他教科の若い先生方が活発に意見を発表しており、その内容も授業の核心を突くものだったことが印象的だった。その後のグループ協議では1グループ4～5人で構成されており、活発な意見交換がなされていた。また、指導主事や管理職の先生方がグループに1名ずつ配置されているが、指導というよりは一緒に協議している雰囲気があった。

②教科部会

教科部会は時間割の中に組み込まれ、主に授業の進度や宿題の出し方などを確認している。また、授業で使うプリントのシェアや授業での課題設定などについても話し合われる。授業の進め方について、気軽に意見交換できる雰囲気であった。

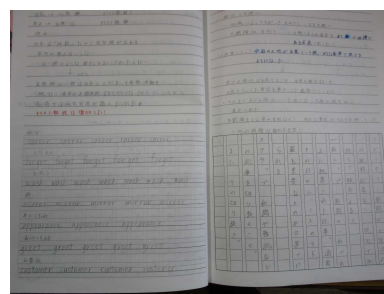
③中教研

中教研にはほぼ100%の教員が加入している。教科ごとに様々な委員会が組織され、全ての教員がどこかに所属している。委員会ごとに月1回程度開催し、調査、研究推進等を行っている。これは福井市が活発に行っていることであり、現在、県全体として組織的に活動していこうと計画しているところのようである。

(3) 家庭学習について

①自主学習「マイノート」

「マイノート」と呼ばれる自主学習ノートが配付されており、1ページに通常の罫線と英語の罫線や国語用にマス目が入ったものが印刷されている。毎日1ページ(週末は2ページ)の自主学習に取り組みせ、毎朝担任がチェックする。2冊目以降は自分で準備したノートで自主学習に取り組みせる。3年生はマイノートではなく、「整理と対策」が家庭学習として出されている。



②その他の宿題

各教科から宿題が出され、毎日2～3教科（多いときは4教科）のワークが集められていた。各教科のワークは2～3種類採用しており、授業の中でも使うことがあるが、ほとんどは宿題として使われている。このほかにバラプリントなども採用している教科がある。自主学習や「整理と対策」の提出はほぼ100%であるが、各教科のワークの提出率は70～80%であった。

「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察報告書

郡山市立御館中学校 吉田 由美子

1 視察校の概要（福井市立進明中学校）

(1) 学校規模

通常学級 13 学級、特別支援学級 1 学級の全 14 学級
全校生徒数：381 名（1 年 128 名、2 年 146 名、3 年 107 名）



(2) 沿革

昭和 22 年 5 月 1 日 四ツ居町 7-49 に福井市第四中学校として創立
昭和 24 年 4 月 1 日 校名を福井市進明中学校に変更
平成 9 年 7 月 5 日 創立 50 周年記念式を行う

(3) 学区の特徴

市内中心部の住宅街に位置するが、少子化等の影響で毎年生徒数が減少している。

(4) 特色ある教育

- ・弾力的な学級編制を活用した T T
- ・時間割内に教科会を設定
- ・朝学習と学年課題

2 視察の内容

- 【6 月 26 日（月）】・研究協議会（全体会・グループ協議）への参加
 - ・一週間の研修の確認
- 【6 月 27 日（火）】・授業参観（数学：2 の 1、3 の 2、3 の 4、1 の 3）
 - ・研究推進委員会
- 【6 月 28 日（水）】・校長講話（学力向上及び中教研の組織について）
 - ・授業参観（数学：2 の 1、2 の 3、2 の 4、3 の 3）
- 【6 月 29 日（木）】・明道中学校訪問（中教研数学部長 岡本靖典校長に話を伺う）
 - ・授業参観（数学：3 の 4、理科：2 の 1）
- 【6 月 30 日（金）】・授業参観（数学：1 の 2）、英語科部会への参加

3 視察の成果

(1) 数学科の取り組み

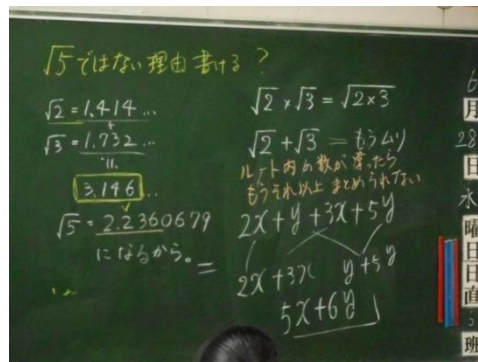
① 授業の持ち方について

- ・タテ持ち…数学担当教員 3 名

	所属	1 年	2 年	3 年
見崎 T	2 年 1 組 担任	3 組	1 組、4 組	3 組
松浦 T	1 年 2 組 担任	1 組、2 組	5 組	2 組
大西 T	3 年 副担任	4 組	2 組、3 組	1 組、4 組

- ② 教科（数学）部会の持ち方について
- ・毎週月曜日に実施…時間割に組込
 - ・学習進度の調整、指導法の情報交換など

- ③ 深い学び
- ・生徒による説明や証明の機会を多く設定
 - ・発問の工夫
 - ・活用問題を扱う授業
 - ・学び合う場の設定



- ◎ タテ持ちによって、教員同士の話し合いが必要となる。それによって指導効果が高まり、学力向上に結びついていることは明確である。また、学校としての体制づくり、枠組みづくりについても本県において参考になる取り組みである。

(2) 校内研修の取り組み

- ① 指導主事訪問（6/26月）研究協議会に参加して
- ・提案事業における協議会…多くの先生方が率直に意見を出し合い語り合う場
特に若い先生方の発言が会を盛り上げていた
グループ協議においても、活発に展開されていた
若い先生方を認め育てる温かい雰囲気が感じられた

- ② 研究推進委員会
- ・研究主任、各研究部長により構成
 - ・毎週、実施…時間割に組込
研究主任を中心として、今年度の方向性や内容について話し合う

- ◎ 研究協議会や研究推進委員会、教科部会にも参加させていただいたが、どの場面においても、教師全員が遠慮なく対等に意見を出し合える雰囲気が感じられた。

(3) 家庭学習の取り組み

- ① 学年の課題
- ・2年生…マイノートの活用
1日1ページ
 - ・3年生…進路対策テキスト
1日4ページ

- ② 各教科の課題
- ・数学科…ワークブックを2冊使用
教科の先生が空き時間に確認…ほぼ毎日チェックをしている

- ◎ 学習課題については学年の実態を踏まえて出題されていた。課題の量については、福島県と比較して多く感じられた。教師間の共通理解のもと、徹底して学習に取り組ませている体制が整っており、学力の定着に結びついていることが頷ける。

福井市足羽中学校視察報告書

石川町立石川中学校 武田 崇宏

1 視察校の概要（福井市立足羽中学校）

福井市足羽中学校は、福井市最南部に位置し、鯖江市と隣接している学区で、田園地帯と県営住宅を含む新興住宅地が混在する地域である。

中学校には、麻生津小、清明小、文殊小の3つの小学校から上がってくる。

各学年5学級で1学年161名、2学年138名、3学年155名、特別支援3学級10名、計464名在籍している。

特色ある教育として、①ドリルコンテスト②朝読書等がある。また、③日常的な教員研修（OJT）が行われている。

① ドリルコンテストでの基礎基本の充実

- ・年間を通して5回、1教科ずつ全校一斉ドリルコンテストの日を設ける。テスト1週間前に生徒にテスト範囲を示し、テスト勉強に取り組ませる。
- ・テストは帰りの会前に実施する。テストは20分の内容。
- ・結果を成績連絡表に載せる。満点賞は賞状を出し、学年だよりに載せる。また、学年ごとに学級の平均点や合格率等を掲示し、学年集会で学級の表彰を行う。
- ・出題は教科担任が行い、採点・再テスト・補充学習会などは各学年で行う。
- ・各学年で、5回のうち実施時期を話し合っ振り分ける。

② 朝読書の実施（新聞コラムの活用）

- ・落ち着いた1日のスタートにすることと、読書の習慣を身につけさせるために実施。
- ・本は自分で用意させる。忘れた生徒は学級文庫を使うが原則自分で用意する。
- ・宿題などはさせない。漫画・雑誌は利用しない。
- ・毎週金曜日に福井新聞「越山若水」の視写を実施。
 - 1年 コラムの視写（全文）する。
 - 2年 コラムの感想（5～6行）をまず書き、済んだら視写（選んだ部分）する。
 - 3年 新聞記事の要約と自分の考えを書く。

③ 日常的なOJTの在り方（生徒指導の面から）

- ・校務分掌における生徒指導部は、学年生徒指導部の男性1名、女性1名と特別支援1名の8名で構成される。構成メンバーは若手からベテランまでさまざま。
- ・生徒指導部会では、その時期に応じた生徒指導上の検討事項が話し合われる。特に決まりやルールの変更については、それができた経緯について在任歴の長い先生から若手の先生に対してしっかりと説明があり、それを踏まえた上で検討が図られる。特に、荒れの原因になるような内容はしっかりと伝達されている。
- ・生徒指導部会では、会が短時間で終わっても若手教員から指導の基準について質問があったり、靴箱の現状について確認したいという申し出があったりと積極的に発言する雰囲気がある。

2 視察の内容

【6月26日（月）】

校長室にて、校長先生にご挨拶し、1週間の日程について説明を受ける。

【6月27日（火）】

8時10分の職朝（朝の打ち合わせ）に参加し、その後、朝の学級の様子を参観させていただく。

午前中は数学の授業を中心に、授業参観させていただく。
校長先生、研修主任、生徒指導主事からそれぞれお話をいただく。
6校時、全校集会を参観させていただく。

【6月28日（水）】

指導主事計画訪問の日であったので、指導主事とともに授業参観させていただく。
5校時目は研究授業、その後研究協議に参加する。

【6月29日（木）】

30日（金）に実施する授業の構想を派遣教員3名で検討する。
理科の教科会に参加させていただく。
英語の授業公開及び研究会に参加させていただく。

【6月30日（金）】

派遣教員による授業を参観する。
数学科教科会に参加し、派遣教員による授業の事後研究会を行う。

3 視察の成果

(1) 数学科の授業について（「タテ持ち」と「教科会」について）

「タテ持ち」は1つの学年を複数の教員で指導するため、学年を任される「ヨコ持ち」に比べ教員にかかる責任が分散される。また、3学年指導することで、系統性を意識した授業づくりを行うことができる。教科担任によって指導法が異なることもあるが原則「学力を上げるのは学年で」という考えで取り組んでいる。

「タテ持ち」にすることで「教科会」は必須の会議になる。「教科会」では、主に授業の進度調整について話し合われるが、学習指導の方向性、考査や評価に関すること、教材研究に関することなども議題に上がる。そうすることで、クラス間のばらつきをなくし統一した指導が可能となる。また、教材研究についてのアドバイスやアイデアをもらえたり、授業の悩みを相談できる息抜きの場にもなっている。

「タテ持ち」で「教科会」があることで、若手の育成、教員の授業力向上につながっていると感じた。

(2) 校内研修について

全教員が年2回以上の授業公開を行い、教科を越えて参加し合う。7つの研究チームを作り、少人数で小回りがきくよう年齢、教科、男女比を考慮して構成し、研究を行う。

同一学級の教科担任による授業盛り上げ作戦会議を行い、授業のしやすい学級の土壌づくりを協働で行っている。

(3) 家庭学習について

各学年で学習予定表に基づいて学年課題が出される。学年課題は学年の教科担任が準備する。（教科で何を学年課題に出すかは教科会で確認されている。）その他、各教科の課題が出される。

課題は朝のうちに提出され、放課後までに返却される。また、未提出の生徒は放課後居残り学習をしなければならない。（居残り学習には部活の副顧問があたる）また、教科の課題については、授業内で確認（生徒が授業課題に取り組んでいる最中に）、返却がなされる。

小中9年間を見通した『ASUWA家庭教育スタンダード』を作成し、学校からの押しつけにしない保護者主導の家庭学習の習慣づけを図っている。

福井県視察報告書

矢吹町立矢吹中学校 山崎信一

1. 視察校の概要（福井市立足羽中学校）

福井市の最南部に位置し、鯖江市と隣接。田園地帯と県営住宅を含む新興住宅地が混在する地域。1年生5クラス164名、2年生5クラス143名、3年生5クラス157名、計464名。昭和24年3月、麻生津中・下文殊中・六条中を廃止・合併し、組合立足羽中学校が創立。昭和46年9月福井市立足羽中学校となる。昭和58年5月、校訓「自主・自立・実践」を制定。平成22年4月、コア・ティーチャー養成事業委嘱。

清明小・麻生津小・文殊小から進学。中学校区教育として小中連携組織があり、小中合同研究会・小中合同ボランティア・小中合同あいさつ運動・合唱コンクール・中学校部活動見学・Asuwa教育スタンダードなどを行っている。

生徒の実態として、素直で明るく、あいさつができる。落ち着いた雰囲気での学習に取り組む。半面、人間関係づくりが上手でない生徒や欠席がちな生徒が見られる。部活動に積極的な生徒が多い。

（平成29年度学校要覧より）

2. 視察の内容

【6月26日（月）】

校長室にて校長先生・教頭先生にあいさつ。日程表による1週間の日程確認を行う。教頭先生に校舎を案内していただく。その時、2学期制であること、5月に修学旅行、6月に合唱コンクール、7月に地区中体連が行われること、福井は小中の学力特に基礎が高いが、発想力や高校大学の学力が低いことが課題であること、英検が入試に配点（3級+5点、準2級+10点、2級+15点）されること、などの話題が上がる。

【6月27日（火）】

8時前に到着。玄関はオートロック。いつもしまっていて、インターホンで話して、あけてもらう。他の学校でも同様らしい。8時10分から職朝（職員朝礼 毎朝行われる朝の打ち合わせのようなもの）が行われる。この時間は、副担任が学年を見回る。生徒全員プリントに取り組み、終わったら読書をしている。誰も喋らず、ぼんやりしている生徒もいない（研究授業で全職員が見学し、他の授業が自習のときでも同様）。大きい声で全員あいさつ、廊下でのあいさつ、朝の会では何もせず話す人の目を見るなど、生活態度がとても良く、身に付いていると感じた。特に小学校で厳しく学んでいるらしい。

この日は数学の授業見学と、研修主任、生徒指導主事、校長先生による説明を聞く。足羽中学校はいろいろな高校に行けるので、上位の高校を狙わない生徒が多い。不登校の生徒は、理由なく5日休むと、市へシートを提出する。高校入試の変更点として、英検の優遇が今年度から始まる。そのため、県で受検料1回無料(ただし合格すれば)になる。英語科では今後英検を考慮した指導も必要になってくる。また、入試は選択問題だけでなく、文章で説明する問題を増やす予定がある。

【6月28日（水）】

5校時は1年2組の学級活動で、全職員で参観した。反省会では、ロールプレイとワークシートは有効だったか、という議題で話し合う。原因も考えること、言われたらどうするか、のほうが大切だということ、これを受けて2・3年生はどんな授業をすべきか、受け答えを生徒自身で考えロールプレイすること、など多くの意見が出た。各グループで教科・年代が異なるからか、物

怖じせず積極的に色々な視線で刺激的な意見が出ていた。特に、研究授業を基に、その授業の良し悪しだけでなく、自分の学年・学級でどんな授業をするか、と授業反省だけに収まらないところが素晴らしい。他教科の授業でも学ぼうとするグループ協議の良さが出ていた。

【6月29日（木）】

5校時は、英語科の研究授業を参観する。6校時は英語科の授業研究会に参加する。テーマは「新学習指導要領を見据えた授業づくり」で、福井県の英語教育の現状と課題、改訂のポイントと授業づくりで大切にしていることを述べられた。

【6月30日（金）】

1校時は2年1組で授業をさせてもらった。連立方程式の利用を行った。福井土産のシーンから問題文を作り、解決を班で行った。班の中で「表」「1次方程式」「連立方程式」の3つに分かれ、ホワイトボードに個別にとき、同じ解き方の人で集まって教え合い、班に持ち帰って発表する、という形式で行った。各班活発に話し合い、慣れていないという様子は見られなかった。連立方程式の良さを次時で感じる予告をしても良かったと感じた。

3校時は数学科の教科部会に参加させていただいた。

3. 視察の成果 取り入れたい内容・県内に広めたい内容

(1) 算数・数学科の授業について 縦持ち・教科部会

・縦持ちの実施状況 ～みんなで育てる～

数学科4人で15クラスの授業を分け、それ以外に学活・道徳・総合、学年会、教科部会で時間割を作る。1人平均週17時間。教科によっては、3年生を持たない（初任者のため）、3人で3クラス合同（体育）などもあるが、基本どの教科も縦持ち。

「ずっと前から（保護者の代から）縦持ちをやっているのだから、福井ではみんな当たり前と感じている。だから長所短所はよくわからない。保護者からの要望、クレームもない。1人の教科担当が学年全体を持つと、全学級が低くなることもあるのでは？ みんなで持ったほうが良いと思う。同僚性も自然に育つ。学年学習の責任が軽くなる（教科部会で話し合うので）。」とのこと。

毎週時間割を発行している。基本的に授業交換する。補欠授業は実施しない。

成果と課題

- 授業準備は大変だが勉強になる。各学年の学習状況がよく分かり、系統性を意識して行える。
- 教科部会で指導観や教材の共有化を図り、指導力向上につながる。授業のやり方（ワークを毎日出す、演習して解答）が統一される。
- 全教師が全学年を担当するので、教科部会で話しやすい。
- 次年度どの学年に配属されても大丈夫。他学年、という感じ（お客様感）はない。教師全員で生徒全員を育てる、という雰囲気（生徒指導でも同様の話をしていた）。
- 教科部会や研究授業など、時間を確保しなければならない（空き時間、放課後、部活など）。

・教科部会の実施状況 ～みんなで考え、みんなで取り組む～

進度合わせ、苦手な所と教え方、単元の捉え方、学習指導の方向性の検討、宿題プリント、教材教具の割当、特別室の授業割当などを話し合っていた。最初は毎日のちょっとした内容でも、話題がその都度どんどん広がっていく感じである。

他にも、考査問題の検討、採点基準、指導要録・通知表・調査書などの評価の検討、ドリルコンテスト問題の検討、対策の取り方、テスト前学習会の持ち方、検定受検について、作品の選定、中

教研や県外視察などの報告、指導主事訪問の指導案検討、文化祭で理科室の展示、科学部の展示場所を考える、自由研究は1年ではレポートの書き方を、2・3年は自分で調べることをテーマにしよう、SASAや全国学調の分析や対策など、話し合う内容は多い。

若い人を主任にし、話し合う。年配がフォローし、若い人や転入者を育てていく感じ（40代がない）。各小中学校の主任が集まり、教科主任会も行われる。審査会などが中心。

成果と課題

- 情報（校外の研究会や授業研究会、研修講座、教材研究についてのアイデアやアドバイス、つまづきや悩み、生徒の情報交換）を共有できる。
- 少人数での話し合いの仕方、問題解決の仕方、運営の仕方を若い教師が学べる。
- 全教師がやろうとする意識が必要。「忙しいから今日はなし」では継続しない。

・日々の授業づくりの状況 ～褒めること、日々の定着、生活態度の徹底～

基本はよく身に付いている。宿題や家庭学習で定着させている。SASAを2年でやってその傾向を教育委員会へ報告、アドバイスを各校にもらい、問題練習を行う。授業では適用問題を多くやらせたほうがいい。イベントは時々入るくらいでいい、という意識である。

特に、分かる喜びが持てるようにできたら褒めること、それらを活動に活かさせて自信を持たせること、集中が続くように授業を15分毎に区切ること、「ここならいける」と苦手な生徒も活躍できること、間違いは書かせないと心に残らないこと、などの工夫が印象的だった。

多い宿題にもあきらめずしっかり提出する生徒が多い。生徒の集中力、生活習慣の良さが授業や学力の充実につながっている（無言清掃、ノーチャイムと2分前着席、あいさつ声出し、生徒相互による活動チェックとその反省考察発表、一人に押し付けられないみんなでやる）。

朝の学習は読書が主だが、ドリルコンテストやテストが近い時期はプリント学習を行う。水曜日は新聞を視写。読書スタートだと静かで集中力が付く。活字にふれる機会も増える。福井市では巡回図書で、1週間クラスに推薦図書が人数分(30冊程度)置かれる。

成果と課題

- 問題演習を授業や家庭で行い、定着を図る（毎日やる、宿題の有用性の実感、等の工夫）。
- 教育委員会との協力（より実践的な報告と助言）。
- 全教師による生活指導の徹底。時間も余裕ができる、アドバイスを活かす。
- 高校大学になるとトップクラスがない、意見を出させることや生活への有用性が課題。
- 読書の質を高める課題はある。中学生にふさわしい本をなかなか読まない。

（2）校内研修について

・校内研修の計画と内容 ～チーム作り～

研究協議は、授業研究チーム(A～Fチーム、5人程度)で話し合い、ワールドカフェ方式で各班の話し合った内容を報告し、答えを導き出す。Aチームに参加したが、各自気になることを話題に出し、年配の先生が考えを述べ、それに賛否意見が出されるなど、活発だった。このグループで、普段から指導案の検討や研究授業を行う体制とのこと。同じ教科でないと意見が出ないのでは、と思ったが自分も数学以外の授業見学をして意見交換できたので、有効だと感じた。他にも、授業盛り上げ大作戦を学級担任と、その学級の教科担任というチームで行っている。学級特性、雰囲気、盛り上がったシーンや困ったことを話す。他教科でも参考になることがある。年に数回行われる。

チーム作りがいろいろなところで意識されている。次を育てるために教科部会や生徒指導部など、積極的に若手を起用している。年配に言われるままではなく、自分で考えて行動し、それに助言している（この中学校の生徒と先生の関係に似ている。地域性かもしれない）。

研究組織として、足羽中学校区教育研究会があり、夢を育む生き方教育部会・授業づくり部会・課題を抱える生徒支援部会、に分かれる。小中合同チームで、夏休みに小学校とやり取りし、9年間でどんな子どもにするか、子どもの情報交換、などを行う。他にも、研修会（前半が仁愛大教授の算数指導講演会、後半が学力づくり・心づくりの分科会と話し合い）、合同音楽会（中学校の合唱コンクールに小6が参加 Nコン奨励賞）、あいさつ運動（中学生が小学校の玄関であいさつする）、教育ウィーク（母校訪問、校下一同駅伝競走大会や小学生部活動体験会）、合同ボランティア（1年生が出身小学校へ行き、5年生と一緒に廊下磨きをしたり、輪になって中学校生活の話を聞いたりする）、オープンデー（小学校の先生が授業参観に来る）など、小学校との関わりがとても多い。成果や画像、指導案、テーマ、概要、課題をカードで提出する。ここでもメンバーは年齢・男女・教科のバランスを考えて構成し、若い世代を中心にすることでリーダー育成を心がけている。

成果と課題

- 教科や世代を超えたチーム作り。あらゆる視点からの話し合い。共通のゴールを目指す。
- 次世代のリーダー育成。やらされるのではなく、考えて行動する。
- 小学校との協力。行事交流により、お互い話しやすくする。
- 小学校との人事交流の活発化。相互理解。

（3）家庭学習について ～学校全体の取組、保護者との連携～

各教科からワーク2ページくらい毎回提出。また、学年から毎日プリント(5教科)を出し、ファイルに綴る。毎朝班長が声がけ、チェックし、教卓に提出。担任や教科担任が内容をチェックし、すぐ返す。未提出は放課後個別指導。各学級1名程度を部活副顧問が50分見る。教科ではなく学年で見る。校長からも言われるので、教師全体でしっかり取り組める。（教科任せ、学年の一人に押し付けない）宿題をやったら報われるようにしている（褒めたり授業にリンクしたり）。努力したことが報われる成功体験を継続させること、宿題は日々家でできるように提出したその日のうちに返却し定着化を図ることを意識している。

家庭教育力の向上について、「家庭教育スタンダード」「スマートルール」「ASUWA 教育スタンダード」を浸透させるため、配付するだけでなく、保護者会等で説明する。“家庭のせいせず、学校でがんばろう”という意識を持ち、特に学習習慣やSNSの使い方に力を入れている。10月のPTAプリントで、今年度の全国学力・学習状況調査の結果と対策が配布されていた。かなり詳しく述べられており、教師と家庭で協力して取り組もうとする意識が感じられた。

基礎・基本の確実な習得を目指し、ドリルコンテストを年5回（5教科）行う。各学級の合格率や平均点を学級長が集計、発表することで、学習習慣の定着、意欲の継続と促進を図っている。

成果と課題

- しっかりやらせ、しっかりチェックする。いい加減な扱いをしない。発揮する場も設ける。
- 生徒自身によるチェック、集計。それによる意識の向上。
- 保護者との協力。プリントや保護者会などで情報をきちんと流し、理解を図る。
- 時間の確保。課題作成と放課後補充の役割分担。学習計画の作成。



2-5

授業態度 4.68 10 / 15 位 挨拶 4.56 15 / 15 位	5月	授業態度 /15 位 挨拶 /15 位	6月
授業態度 /15 位 挨拶 /15 位	7月	授業態度 /15 位 挨拶 /15 位	8月
授業態度 /15 位 挨拶 /15 位	10月	授業態度 /15 位 挨拶 /15 位	11月
授業態度	12月	授業態度	1月

6/20(火)ドリルコンテスト(英)の結果

順位	組	合格率	平均点	満点者数
第1位	3組	67%	80.7	3名
第2位	1組	57%	77.9	4名
第3位	2組	46%	73.5	2名
第4位	5組	45%	69.6	1名
第5位	4組	41%	70.5	0名

3組が英語ドリコンにおいて初制覇を果たしました。おめでとう!

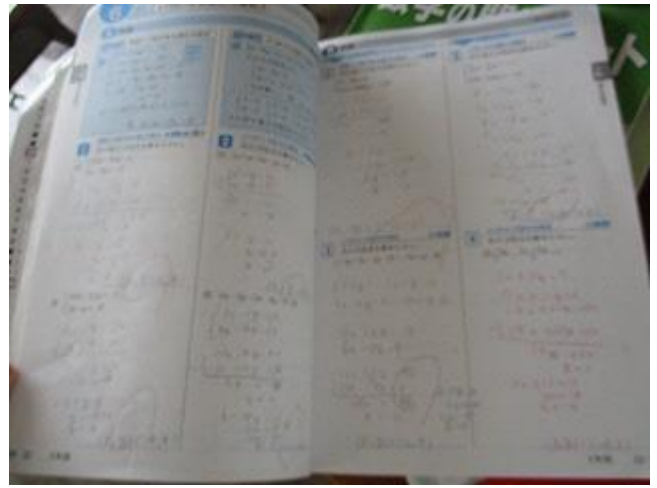


全校順位

いただきます

1位	3年3組
2位	3年4組
3位	3年2組
4位	3年5組
5位	2年1組
6位	3年1組
7位	1年2組
8位	2年4組
9位	1年5組
10位	1年4組
11位	2年2組
12位	1年1組
13位	2年5組
14位	2年3組
15位	3年3組





先進校視察を通して

会津若松市立第五中学校 佐藤 盛俊

1 視察校の概要（福井市立足羽中学校訪問）

福井市立足羽中学校は、全校生徒464人、各学年5クラスの大規模校である。学区内には3つの小学校があり、通学区域は約4km以内である。自主・至誠・実践を校訓とし、心身ともに健康で誠実な生徒の育成と主体的、意欲的に取り組む生徒の育成を学校教育目標に定め、実践している。学習面においては、学ぶ意欲の向上と表現力の向上を大きな目標とし、基礎・基本の確実な習得を重視しながら取り組んでいる。また、部活動も盛んであり、全国大会、北信越大会での活躍も見られるほどである。しかし、月曜日は完全に部活動なしの日とし、委員会活動などを積極的に行っている。

2 視察の内容

【6月26日（月）】

- ・ 15:20 足羽中学校到着（校長室にて、日程確認を行った。）
- ・ その後、教頭先生に校舎内を案内していただいた。（部活動なしで委員会活動を行っている生徒が多くいた。自分たちでドリルコンテストの結果発表を考えたり、文化祭で行うものについて話し合ったりしていた。すれ違う生徒は、積極的にあいさつしてくれ、感心した。また、掲示物は大変きれいで完成度も高かった。）

【6月27日（火）】

- ・ 毎朝行われる“職朝”という、職員打ち合わせに参加した。職朝後の学年打ち合わせも見学。たった5分ずつだが、先生方の足並みを揃える上で大切だと感じた。
- ・ 1、2、4校時「授業参観」3-5 理科、3-4 英語、3-3 国語、3-2 国語、1-5 数学、3-5 数学、3-4 数学を参観。active learning を重視した授業が多く、生徒が積極的に学んでいた。また、適用問題をきちんと取りまわせており、とても大切だと感じた。それぞれの教科において、何を基礎基本と捉えるか、教師がきちんと見定めておくことの必要性を感じられる授業であった。
- ・ 3校時「研修主任より」現状と課題をもとに、今年度の取り組みを説明していただいた。特にユニバーサルデザイン、ピアサポート、ICT 活用がキーポイントであることが十分伝わってきた。
- ・ 5校時「校長講話」、6校時「生徒集会」に参加。放課後、部活動見学。

【6月28日（水）】

- ・ 1校時、自主研修。
- ・ 2、3、4校時「指導主事訪問」1-5 数学、2-2 数学、3-1 数学、2-1 英語
2名の指導主事と一緒に授業参観させていただく。生徒の興味関心を高める手だてが工夫された授業ばかりであった。
- ・ 5校時「研究授業 1-3 学級活動」
指導主事2名に加え、市教委からも3名加わり、本校職員全員が参観する30名を越える研究授業となった。「よりよい言い方を考えよう」という課題のもと、ロールプレイや班活動などを取り入れた大変活発な授業であった。
- ・ 6校時「事後研究会」5校時の学活の事後研究会に参加。
小グループを6班編制し、授業の反省を行った後、「集団づくりに必要なコミュニケーション力を育てるには？」というテーマ設定のもと“ワールドカフェ方式”による研究会を行った。その方式は、まずは割り当てられたグループでそれぞれが意見を出し合い、その意見をもって別グループに行って討論し、また元の班に戻って最終的な結論を出すという流れであった。小グループということもあって活発な意見が出されていた。また建設的な意見が多く、教員のコミュニケーションがしっかりととられていることを痛感した。これが、学力向上にも直結するのだと思う。

【6月29日（木）】

- ・ 1校時、自主研修
- ・ 2校時、理科の教科部会に参加した。そこでは、授業の進度や教材の共有、夏休みの課題や理科室の使用についてなど、たくさんの方が話されていた。
- ・ 3校時「タテ持ち」について、質問をたくさんぶつけてみた。結果、タテ持ちに対する心配はほとんど何えず、むしろ“良さ”を感じた。
- ・ 4校時、明日の福島県教員による研究授業について、本県視察者3人で事前研をひらいた。（2年、連立方程式の導入）

- ・ 5校時、英語科佐藤教諭による研究授業を参観した。私たち以外に福井県教育センターの先生方や石川県の先生方も視察されていた。他県から視察されるというだけあって、とても厳選されたすばらしい授業であった。
- ・ 6校時、5校時の研究授業の事後研究会に参加した。教科書以上のレベルを毎日実施していることや4つの力を満遍なく訓練すること、これをやれば必ず点数が上がるという佐藤教諭の持論などが聞け、たいへん考えさせられた。

【6月30日（金）】

- ・ 1校時、福島県教員による研究授業を行った。コーディネートによる自然な流れで課題提示された後、班で3つの解法を検討し、解法別にグループを再結成し話し合い、再度班に戻って発表会を行うという授業を行った。これは二日前の研修会で採用されていた「ワールドカフェ方式」を参考にしたものである。終始、話し合い活動が積極的になされ、大変すばらしい授業だったと感じた。
- ・ 2、3校時、事後研究会を行った。足羽中の数学教員4名と校長先生からそれぞれ感想をいただいた。ほとんどの先生が賞賛してくれ、授業の成功を感じた。特に身近な話題の提供とワールドカフェ方式による話し合い活動の充実、生徒の学習意欲面を評価していただいた。しかし、コーディネートによる授業の組み立てやまとめ方に関しては、福井の先生方は“教師主導”で行っているとのことで、その方がぶれずにやりやすいのでは、という意見をいただき、今後の参考になった。

3 視察の結果

(1) 数学科の授業について

- ・ 「タテ持ち」について

数学教員4名が全学年に携わっていた。ヨコ持ちで一つの学年だけが学力低下としないようにするためである。準備は大変だが、教師同士の会話が增え、学校の活性化にもつながる。評価や進度など合わせる部分も大変になってくるが、それだけきちんとやらなくてはいけない部分が増えるので、きめ細かな指導につながる。また、“授業盛り上げ大作戦会議”と称し、一つの学級に携わっている教師が全員で情報を共有することで、生徒理解につなげることもできる。

- ・ 「教科部会」について

タテ持ちなので、たくさんの情報共有が必要となる。そのため、週に一度、教科部会が時間割の中に組み込まれており、様々な話し合いがなされている。

(2) 校内研修について

- ・ 「チーム設定」

年齢や性を考慮した上で、先生方をチーム A から F まで6班編制しており、それぞれのチームでテーマを決めて取り組んでいる。特に若い教員の意見を反映しようとしている点がすばらしい。

- ・ 「伝え合う、深め合う」

スケッチブックやホワイトボードが学校のいろいろな場所に設置されており、教師はもちろん、生徒からのメッセージも伝え合っている。

- ・ 「ドリルコンテストの実施」について

生徒が積極的に関わっている点がすばらしい。足羽中学校では、①練習問題を生徒が作成 ②プレテストを数回実施 ③結果を生徒が表彰 ④結果の掲示を生徒が実施 ⑤委員長が取り組みを反省 ⑥先生方からの多面的な指導 そして、「タテ持ち」だからこそ、担当クラスに熱心に関わることができているように感じる。

(3) 家庭学習について

- ・ 「学年課題」

毎日、学年課題が出されている。プリント1枚程度が多く、ファイルにとじて管理されていた。もし、提出できなければ、放課後に居残り学習をすることになる。

- ・ 「教科宿題」

学年課題とは別に、数学科からも宿題が毎日出されている。ワークで半ページから1ページぐらいの量である。これは授業開始時にチェックされており、上述通り、忘れた場合は補習となる。今は学年統一がされてないようだが、できれば統一して実施していきたいということだった。

1 視察校の概要（大仙市立神岡小学校）

神岡小学校は、秋田県大仙市のほぼ中央（神岡地区）に位置し、全校児童239名、教職員26名（生活支援員5名を含む）の学校規模で、バスやタクシーで通学する児童もいた。地区内には神岡小学校、平和中学校の各一校という環境のため、小中接続が密に行われており、「神岡スタンダード」（授業の手引き）や「家庭教育の手引き」などの活用を共通理解の下で進めていた。

保護者や地域とのつながりも「コラボ・スクール構想」に基づき行われており、保護者や地域との連携も密に行われていた。

2 視察の内容

【6月26日（月）】

○大仙市教育委員会訪問

教育長・教育指導部長から大仙市の学校教育についての説明を受けた。「共・創・考・開」を柱とした取組が行われており、キャリア教育にはポイント制を導入し、児童・生徒が主体となって取り組めるシステムが構築されていた。

学校と保護者、地域だけでなく、様々な機関との連携も進められており、秋田県の教育力の強みは、そうした連携によるものだと感じた。

【6月27日（火）】

○神岡小学校訪問（学校経営の説明、5年竹組社会科・総合的な学習を参観）

校長先生から学校経営の説明を受け、保護者や地域との連携、神岡スタンダードや家庭学習の手引きなどの共有による小・中連携、児童の主体的な取組等について知ることができた。

OHCを効果的に活用して社会科の授業が進められていた。児童が発表する際も体の向きや重要な言葉などに意識させる言葉掛けを行っていた。



【6月28日（水）】

○神岡小学校訪問（1年竹組算数科・2年竹組算数科・3年松組算数科・6年松組社会科・5年竹組学級活動を参観）

下学年を中心に学校生活支援員の方がサポートしていた。しかし、言葉掛けひとつで泣いてしまう子もおり、担任との連携や実態把握の大切さを感じた。6年の社会科では児童への発問もしっかり考えさせるもので、学び合いの活動も充実していた。

【6月29日（木）】

○神岡小学校訪問（5年松組算数科・6年松組算数科・3年松組算数科、上学年総合的な学習を参観）、平和中学校訪問（3年数学科）

総合的な学習では、秋田出身の「ラート」の日本チャンピオンが子どもたちに模範演技を披露したり、様々な体験の機会を提供していた。

【6月30日（金）】

○神岡小学校訪問（3年松組算数科・4年松組算数科を参観）、5年竹組にて授業実施
5年竹組にて授業を行う際には、児童から「今日は何ページの学習ですか。」といった質問があった。普段から教科書は開かずに授業を受けている子どもたちだが、ページ数を確認することで、家庭学習・復習に生かしているようであった。

3 視察の成果

(1) 算数・数学科の授業について

どの学年も教科書を開かずに授業を進めていた。担任の先生方は教材研究を進め、数値は教科書のもので用いて授業を行っていた。めあては「どうすれば～、なぜ～」の疑問型(ハウツー型)で立てられていた。3年は現職教育主任がTTとして参加し、5年には教務主任が入り、3つに分かれて習熟度別の授業を行っていた。また、全学年午前中に国語・算数を行い、午後には技能教科を中心に授業を行っていた。



授業の進め方を統一することで、児童だけでなく指導者も安心して授業に臨むことができ、学習形態を工夫することでより個に応じた指導の充実が図られていることを学んだ。

(2) 校内研修について

計画的に校内研修を進めているようであった。教育専門監や指導主事に指導をいただくことで、研修の機会もより確保されているようであった。小・中学校の先生が同じ教科で研修する機会を設けており、教材研究の深まりが見られた。

また、神岡地区では「神岡スタンダード」を作成し、共通理解の下、小・中学校の先生方が小・中9年間を見通したスタイルで授業を実践していた

先生方の連携により教材研究も深まり、スタンダードに基づいた共通理解の下で授業を実践していくことで、組織としての校内研修の向上が図られていくことを学んだ。

(3) 家庭学習について

自分たちで目標や計画を立てて家庭学習に取り組んでおり、「一人勉強（ひと勉ノート）」という名称で活用している。家庭では、保護者がアドバイスをしたり一言コメントを書き込んだりしており、それを担任がチェックをしコメントを書き入れたりしている。

校内には、「家庭学習コーナー」を設け、児童や保護者がどのように学習すべきかを確認できるようにしていた。

また、両面刷りの「家庭学習の手引き」（表に小学生版、裏に中学生版）と、保護者用の保存版家庭学習の手引きを配付して、協力を呼び掛けていた。

保護者との連携を進めるには、そのための準備が必要であり、組織的に取り組むことで保護者の意識も変わり、より徹底されていくことを学んだ。

「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察報告書

喜多方市立第二小学校 教諭 平子 理世

1 視察校の概要

大仙市立神岡小学校は、「私は変わる みんなと変わる 未来を変える」を学校教育目標にし、子ども達に大きな夢やチャレンジ精神をもたせ、高い志にあふれた地域の将来を支える担い手を育てていこうという「コラボ・スクール構想」を進めている。特に学習面では、学習意欲の向上に力を入れている。全学年において問題解決型学習や家庭での一人学習に取り組み、効果を上げている。生活面では、心開かれた「あいさつ」の励行に学校・家庭・地域が連携して取り組んでいた。

2 視察の内容

【6月26日（月）】

大仙市教育委員会を訪問し、教育行政視察及び情報交換を行った。大仙市の学校教育は、生きる力を育み、社会を支える創造力あふれる人づくりを教育目標にし、「共・創・考・開」を柱とした取り組みがなされている。「共に支えあう力の育成」では、地域やPTAとの連携を図ったり、学校生活支援員等の配置を推進したりしている。「創造的に生き抜く力の育成」では、自ら自分達の今や未来を創っていこうというコンセプトのもと、キャリア教育の推進や外国語教育に力を入れている。「考え、生かす力の育成」では、児童生徒主体の授業づくりを推進し、学力を高める学びのために教育専門監を配置している。「開き、信頼される学校」では、地域の教育力を生かした体験活動が行われ、公民館との連携を図ったり、家庭学習で親の協力を得たりしていることが分かった。

【6月27日（火）】

神岡小学校校長先生より学校経営説明を聞く。

学校と地域の連携が図られており、地域全体が教育に携わっている。部活の顧問を経験した地域の方が体育の授業に入ったり、高校性が英語の授業を行ったりしている。また、テレビの視聴率やスマホの所持率が低く、読書率が高いなど、勉強に集中できる環境を作り出している。

学力向上のためには、何よりも子ども達の学習意欲を高める取り組みを大切に考えているということであった。子どもの小さな頑張りを賞賛し、根気強く継続することで意欲の向上を図っていた。

【6月28日（水）】

4年生、6年生、3年生の算数科の授業を参観した。

TT授業では、2人の先生が掛け合いながらの授業で、終末では、2つのコース別に適用問題に取り組んでいた。導入で、教師が本時の問いを投げかけると「自分で考えたい。」とつぶやく児童が多く、学習意欲の高さを感じた。また、自力解決では、既習事項の掲示物を見て、解決しようと思える姿があった。ペアでの学び合いでは、「どういうこと？」と自ら聞き返す姿が見られた。

【6月29日（木）】

5年生、6年生、中学3年生の算数・数学科の授業を参観した。

5年生では、適用を図る授業であったが、2つの考えでチームに分かれ、ホワイトボードを使って、自分達の考えの説明を相談しながら書いていた。全体の話し合いの場では、ホワイトボードを見ながら、検討していた。

6年生の授業は、前時で出された、速さを求める4つの考え方でどれが便利なのかを考える学習であった。子ども達から積極的に考えが出されており、その考えを基にして学び合いがなされていた。考えの

発表だけでなく、学級全体で考え、共有し、追究することができるように、教師が上手にコーディネートしていた。終末の評価問題では、導き出された考えを使って説明をする、という問題が出されていた。本時の授業の評価基準に合った適用問題で、大変有効なものであった。

【6月30日（金）】

3年生、1年生の算数科の授業を参観した。

3年生では、「あまりのあるわり算」の学習で、教師が半具体物の操作をやって見せ、これについてどう思うのかを子ども達に発問していた。子ども達の考えを引き出すための工夫が見られた。

1年生でも算数ブロックを使った操作活動が学習理解の手助けとなっていた。問題を読んだだけでは、立式できなかった児童も、ブロック操作によりひき算になることを理解し、正しく立式していた。

3校時目は、5年生の「合同」の第1時目の授業をさせてもらった。導入に時間をかけてしまい、全体での話し合いが十分にできなかったこと、何を学び合わせるのかを明確にして授業に臨むべきであったことが反省点である。しかし、秋田県の真剣に学習に取り組む子ども達と授業ができたことは、大変貴重な経験となった。

3 視察の成果（取り入れたい内容・県内に広めたい内容）

(1) 算数・数学科の授業について

秋田型算数授業として、どの学校・学級でも同じ授業スタイル、問題解決型の授業を徹底させている。また、一問一答型授業からの脱却を図り、子どものつばやきや多様な考えを出させる授業を行っている。算数科の授業では、秋田県の取り組みである、少人数指導に取り組み、2人の教員で指導にあたっている。適用の場面で、2つのコースに分かれ、理解度に応じて問題練習をする授業もあった。学び合いのある授業が行われ、一人の考えを全員に広め、共有し、追究させていくコーディネートを教師が工夫していた。また席順も工夫されており、お互いに教え合いのできる座席になっていた。ペア学習で「どういうこと？」と聞き合う姿や、追究の場で子ども達が相互指名をする場面もあり、学び合いの習慣が身についていた。

(2) 校内研修について

大仙市では、授業力アップのため、教員同士の「学び合い」のため、小中教員の勉強会や研修システムが整えられている。また、12月に秋田県学習状況調査が実施されている。全国と県の2つの調査終了後、結果の分析がされ、年2回フォローアップシートが提供される。webページ上でも、算数科評価問題がアップされ、普段の授業に活用することができる。

教育専門監という制度も教員の指導力を高める点で効果的である。担任と教育専門監と一緒に授業を行い、魅力ある授業を目指していた。

(3) 家庭学習について

大仙市では、お手伝いと家庭学習に力を入れている。どちらも自立した人間の育成を目指した取り組みである。お手伝いでは、家庭での役割を果たし、賞賛を受けることで、自己有用感を育てていく。家庭学習では、「家庭学習の手引き」を配付・説明し、家庭の協力を得て、「宿題と一人勉強」に全学年で取り組ませている。一人勉強では、自分で課題を見つけ、自分で勉強する力を育てることを目指していた。一人勉強ノートは、担任だけでなく、管理職の先生や保護者も目を通し、コメントを書くことがある。学年通信で子どもの取り組みを紹介したり、テストに向けた内容を取り組ませたりすることで、意欲付けを図り、自主的に学習する習慣が身についていた。

「学びのスタンダード」推進事業に係る先進県視察報告書

南相馬市立高平小学校 遠藤 桂子

1. 視察校の概要

大仙市立神岡小学校

児童数 239名（9クラス+特別支援3クラス）

職員数 26名（内 生活支援員5名）

特色ある教育：神岡小学校中期経営計画（スクールマニフェスト）

テーマ「地域社会とともにある神岡小学校の充実・深化」（チーム学校）

～コラボ・スクール構想による担い手育成～

（1）地域に開かれた学校づくり<学校を大事に思う保護者・地域住民>

保護者や地域の方が教育活動に参画する体制を強化

（学習サポート・環境整備サポート・学校行事サポート

夏休み寺子屋・漢検実施・高校・大学との連携など）

<例>・高校生と英語学習

・地域の空き店舗で学習（地域の方が講師）

（2）確かな学力の定着を保障する授業づくり

二極化への対応⇒下位層に厚い対応（特別支援教育、少人数指導）

課題のある地域へ、人（教育専門官・支援員）と予算の導入

<大仙市の教育行政による支え>

神岡スタンダード（平和中学校区共通実践：教えのガイドラ

ン）による小中一貫の指導、学習規律の徹底

※子供たちの素直で生き生きとした姿、あいさつが素晴らしかった。また、子供たち一人一人、全クラスを大事にした掲示物が素晴らしかった。

2. 視察の内容

【6月26日（月）】大仙市教育委員会訪問

「大仙市の学校教育・学力向上に向けた取組について」

【6月27日（火）】大仙市立神岡小学校視察

校長講話「神岡小学校の学力向上のための取組について」

第6学年授業参観・・・図工、総合

【6月28日（水）】大仙市立神岡小学校視察

第4学年算数、第6学年算数、第1学年算数 参観

【6月29日（木）】大仙市立神岡小学校視察

第5学年算数、第6学年算数 参観

大仙市立平和中学校視察 第3学年数学 参観

【6月30日（金）】大仙市立神岡小学校視察

第6学年にて 算数「速さ」の授業を行う。

第2学年算数 参観

3. 視察の成果

学力調査好結果の要因（校長先生の講話より）

- ①学習規律の徹底・・・私語なく落ち着いている、話し方・聞き方
- ②礼儀正しさ
- ③算数B問題の無回答率の低さ
- ④不登校児童生徒数が少ない

(1) 算数科の授業について <あきた型探求学習の授業スタイル>

○秋田県が全国比を上回るところ

- ・授業の導入で見通し（めあて・課題）を持ち、終末で振り返り（まとめ・評価問題）を行う。

<めあてと課題を明確に区別、子供たちから生まれる「？」を課題とする>

- ・考えを話したり書いたりする学習及び話し合い意見交換する学習（引き出す学習法）
- ・放課後を利用した補充学習及び習熟の遅いグループへの少人数指導

○ノート指導・・・A4ノートを使用、見開き2ページを基本とする

<ノートと板書の連動>

自分の考えを表現するノート、まとめ・振り返りのあるノート

○少人数学習・・・習熟度別、課題別、コース別で学年・クラスを解体して行う。

○指導体制・・・学力テストへ向けて、低学年教員が高学年の支援に入る。

研究主任は学級担任せず、算数TTとして指導を行う。

(2) 校内研修について

○授業について、先生方が気軽に語り合えることが、何よりも授業改善につながる。

堅苦しくない校内授業研究が行われている。

○指導主事や大学教授などが研修に多く関わり、専門性の高い指導が行われている。

○小中合同の研究会の実施など、小中連携の強い研修システムである。（大仙市）

○「スクールマニフェスト」（学校経営計画）が具体的で、目的意識が高まる。

(3) 家庭学習について

○秋田県が全国比を上回るところ

- ・学校の復習を行う。
- ・自分で計画を立てて勉強する。（一人勉強）

○家庭学習手引き（神岡小学校・平和中学校共通のもの）をもとに、保護者へのガイダンスが行われている。

○一人勉強ノートに保護者がコメントを書くなど、家庭学習に保護者が関わるのが当たり前の風土がある。

※「開かれた学校」という言葉は、学校側が発信することと捉えていたが、「学校・保護者・地域みんなで関わって子供を育てていくこと（チーム学校）」と捉えなおすことができた。今後の実践の中で取り入れていきたい考え方である。

1 視察校の概要（大仙市立平和中学校）

生徒数 103 名（前年比-9）3 学級（前年比-3）【1 年 34 名、2 年 34 名、3 年 35 名】。学区内の小学校は神岡小学校 1 校。神岡小学校とともに昨年度から継続して県教育委員会指定の「いのちの教育あったかエリア事業」推進校となっており、東日本大震災被災地（岩手県大槌町吉里吉里地区）との交流や避難所開設訓練等の防災教育に力を入れている。学期制については、大仙市では二学期制を取り入れている。

2 視察の内容

【6 月 26 日（月）】

大仙市教育委員会を訪問し、大仙市の学校教育についての説明を受けた。「大仙教育メソッド」に基づいて市全体で一貫した課題探求型授業に取り組んでおり、その授業スタイルがほぼ定着している。

【6 月 27 日（火）】

大仙市立平和中学校を訪問し、校長室にて研修の日程や平和中学校の概要説明、学校経営説明を受けた後、授業参観を行った。

研修の全体的な日程について、1 学年が 28 日（水）から 2 日間白神山地にて宿泊体験、2 年生が 28 日（水）から 3 日間職業体験学習となるため、主に 3 年生の授業を担当し、視察期間中は学区内の神岡小学校にも授業参観に行くことを確認した。

平和中学校の課題は、自尊感情や自己有用感の醸成と学力向上。そのために授業の中で生徒一人ひとりが「認められた」と感じることでできる活動を取り入れている。一問一答の形式ではなく、生徒が多様な考えを持ち、互いに深めていくような授業を心がけている。

授業参観では 2 年数学、1 年数学、3 年社会、1 年理科の授業を参観した。いずれの授業においても生徒に課題意識をしっかりと持たせた上で授業を進めていた。

放課後は平和中学校数学担当の大友先生、秋田県教育専門監の本道先生との打ち合わせを行い、29 日（水）の 3 年数学の授業を福島県コアティーチャーで実施すること、30 日（金）に大友先生と本道先生の授業を参観することを確認した。

【6 月 28 日（水）】

午前中は神岡小学校を訪問し授業を参観し、午後は平和中学校にて 29 日の授業準備や 3 年の家庭学習ノートのチェックを行った。

【6 月 29 日（木）】

1・3 校時に福島県コアティーチャーによる 3 年数学の授業を行った。1 校時は〔根号の中の数が異なる場合の加減〕の授業（T1：北会津中室井）。 $a\sqrt{b}$ に変形すること、根号の中の数をできるだけ小さくして計算することをポイントとして授業を展開した。 $a\sqrt{b}$ への変形が定着していない生徒が見られたが、全体的に意欲的に取り組んでいた。

3 校時は〔分母に根号をふくむ式の加減〕の授業（T1：荒海中進藤先生）。分母を有理化して計算することをポイントとして授業を展開した。1 校時の反省から $a\sqrt{b}$ への変形の復習を取り入れた。演習中心の授業とならないよう、生徒の考えを引き出しながら展開していけるよう心がけた。

【6 月 30 日（金）】

平和中学校の大友先生・佐藤先生（非常勤講師）と県教育専門監の本道先生による授業を参観した（3 年「根号をふくむ式のいろいろな計算」・1 年「1 次式と数の乗除」）。

3 視察の成果

(1) 算数・数学科の授業について

中学校だけではなく小学校でも徹底して同じスタイルで授業が展開されていた。秋田県から出されている、授業の構想・立案の流れと授業の流れを可視化した「授業プランシート」にそって授業が構成されていた。小中共通の形式で、本時のねらい・ねらいを達成した子どもの姿を明確にもち、そのためにどのような学習課題を設定していくのかを示したものであった。このシートは大変有効であり、今後活用していきたいと考えている。

中学1年の授業では、長方形の面積を表す式・周の長さを表す式を考えることから、1次式と数の乗除の計算について考えた。「 $3 \times 2x$ 」は計算できるかどうかを考察していくことが授業の中心となっていた。既習事項を振り返り、他の意見に耳を傾け、式だけでなく面積図とも関連させ、さまざまな考えで「 $3 \times 2x$ 」にアプローチしていく様子がとてもよく伝わってきた。また、数学に限らず他教科や小学校においてもA4サイズのノートを使っていること、既習事項を振り返る際にどの生徒も自分のノートをさかのぼって考えていること、教師から「周りの人と相談しながら考えて」と指示が出た際に動かない生徒が一人としていないことなど、見習うべき点が多くあった。本県においても、「授業スタンダード」のリーフレットの他に、このような課題探求型の授業のDVDを各校に配付するなどして全県的に具体的な授業のイメージを共有することができれば、授業力の質的向上につながり生徒の学力向上を推し進めていくものと思われる。

(2) 校内研修について

秋田県の授業の基本スタイルは、子どもたちに課題を発見させてそれを解決していく「課題探求型学習」で、それが校内だけではなく、大仙教育メソッドに基づいて市全体で一貫して行われている。まずは「めあて」と「まとめ」の整合性を図ることを徹底して取り組み、定着するまでに10年かかったとのことだった。

校内においては、現職協議会等の設定の他、定期的に「研修だより」を発行し共通理解を図っており、授業を構成する際の視点が教科・学年に関わらず一貫していた。視察中に参観したいずれの授業も今後の学習の見通しを明確に持つことができ学習意欲が持続できるような授業で、校内研修により全職員で共通した授業スタイルで実践されていた。

教科間・校種間での話し合いがしやすい風土が醸成されていくためには、一貫した授業スタイルを定着させることが重要だと考える。研修体制の確立だけではなく、全県的に具体的な授業のイメージを共有し、共通実践していくことが重要であると考えられる。

(3) 家庭学習について

教育長はじめ市教委の方々、先生方が口をそろえて「家庭学習は保護者の時代から習慣化されており、特に変わった指導はしていない。『家庭学習はするものだ』という認識をみんな持っている。」と言っていたことが印象的だった。

具体的な手立てとして、「神岡型家庭学習の手引き」を小学生用、中学生用、保護者用と作成して配布していた。家庭学習ノートでは児童生徒の保護者にもコメントを書いてもらうようにしており、中学校に関しては毎日のコメントを学級担任だけではなく部活動担当や管理職も書くという取り組みもしていた。提出の有無についてのチェックなどは特にしておらず、家庭学習の習慣自体がしっかりと定着している様子が見て取れた。

家庭学習の充実については、課題追求型の授業が定着しており、子どもたちの課題意識が非常に高いということも影響しているのではないかと考えられる。やはり全県的に「授業スタンダード」に基づいた授業を展開していけるよう、具体的な授業のイメージを持つことが重要であると考えられる。

大仙市神岡地区を訪問して

南会津町立荒海中学校 進藤 健二

1 視察校の概要

大仙市立平和中学校は、全校生が103名（学年1クラス）の小規模校である。学区の小学校は、神岡小学校1校のみである。共通実践として、「神岡スタンダード」の実践、「神岡型家庭学習の手引き」の活用など、9年間を見通した小中連携が図られている。

校訓は、「在平素」の下、保護者や地域が一体となった防災教育を学校経営の柱に据え、教育目標を期して教育活動が行われている。今年度は、「いのちの教育あったかエリア事業」推進校として、「心の教育」の一層の充実を図っている。

2 視察の内容

【6月26日】

＜大仙市教育委員会の学校教育の説明より＞

- ・「手伝い」と「家庭学習」をつなぐ

小中学校が連携し、自立する人間の育成を図っている。家庭の中でできることを自分で見つけて取り組むことで、家族の中で認められ自己有用感が育まれる。それを家庭学習で、「自分で課題を見つけて、その解決に向けて取り組む」ことで、「自分で自分を育てる」姿勢を育てている。

- ・授業での一貫した取り組み

「めあて」、「まとめ」についての扱いを重要視し、「今、何をしているか把握してやっている」ことから、成果が出てきている。

【6月27日】

＜校長講話、避難所開設訓練、授業参観より＞

- ・少人数学級、少人数指導ではなく、まず授業改善が最大ポイント。探究型の授業で、生徒自らが課題を設定するという意識を高める。また、授業で多く認められる場面を設定し、自尊感情を育成していく。不登校生徒もいたが現在は解消している。
- ・防災教育を柱にしている。その一環として避難所開設訓練を実施。地域との連携を図り、こころを育てて、学力の向上も図っていく。
- ・授業参観では、学年、教科を問わず、探究型の授業であり、生徒が主体的に活動する姿が見られた。

【6月28日】

＜神岡小学校の授業参観より＞

- ・小学校も探究型の授業が展開されている。A4サイズのノートに、必要に応じてプリントを貼り付けるスタイルは共通。
- ・6年社会科の授業より。学習課題「武士について調べ、大きな学習課題をつくろう。」単元の導入の時間で、事前に下調べを行い興味をもったこと、学習内容にしてみたいことを整理する時間となっていた。

【6月29日】

＜実際に授業研究を実施より＞

- ・探究型のスタイルを行う。生徒から意見を吸い出すことや考えを見取ることが困難で、時間が思った以上にかかった。まとめは、コンパクトでインパクトのあるものにする必要があった。発問や時間配分を工夫する必要があった。

【6月30日】

＜教育専門監との打ち合わせ、教育専門監による授業の参観より＞

- ・T1が授業プラン、板書計画の作成をもとに授業の構想を提案。専門監もプランを持っており、話し合いをしながら授業の構想づくりを行っていた。
- ・授業参観は、次の「視察の成果」を参照

3 視察の成果

(1) 算数・数学の授業（一貫した「授業」・「板書」・「ノート」）について

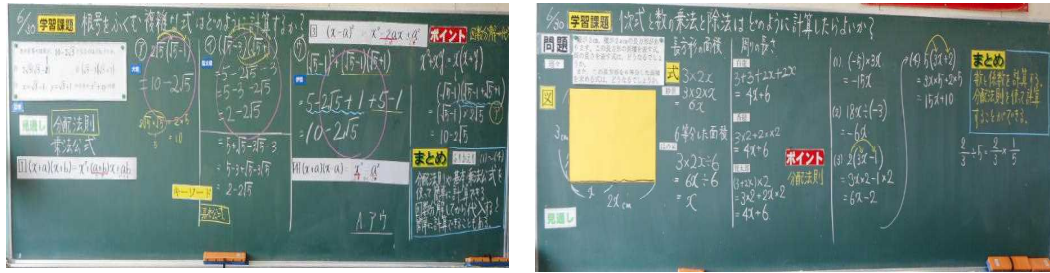
＜授業について＞

授業は、「授業プランシート」により、授業の構想は以下のように立案されている。①本時のねらい→②ねらいを達成した子どもの姿→③評価問題→④想定しているまとめ→⑤想定している比較・検討→⑥想定している学習課題・学習のめあて→⑦学習問題 これにより、ねらいとまとめの整合性が徹底されている。また、どの教科、学年を問わず「探究型」の授業が展開されている。また、生徒の

反応によって、柔軟な展開がされており、意見がわかれたとき、即興でディベート的に意見を対立させ、根拠を明確にしながらか課題解決を図っている授業(数学科)もあった。

<板書について>

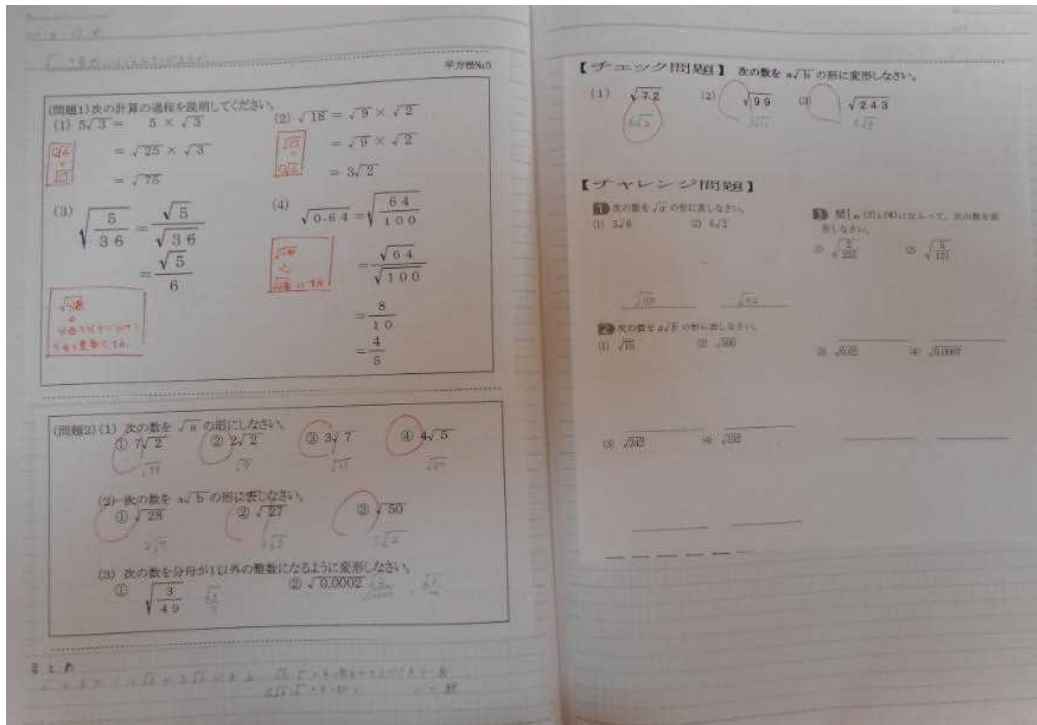
1時間の授業で、なにを学習しできるようになったのかがわかるように、板書が工夫されている。



授業プランシートで立案されたことを基に、授業が展開され、板書も構造化されている。**問題**→**学習課題**→**見通し**→課題解決 (**ポイント**の表示)→**まとめ**→**チェック問題**→**振り返り**

<ノートづくりについて>

ノートは、「A4サイズ」を利用し、毎時間、見開きで2ページにまとめられている。写すのに時間がかかる問題や評価問題はプリントが配付され、その都度ノートに貼り付けている。1時間の授業で、学習した内容や生徒自身が何ができて何ができなかったのかなど、わかるように整理されており、それが家庭学習での利用につながっていると思われる。



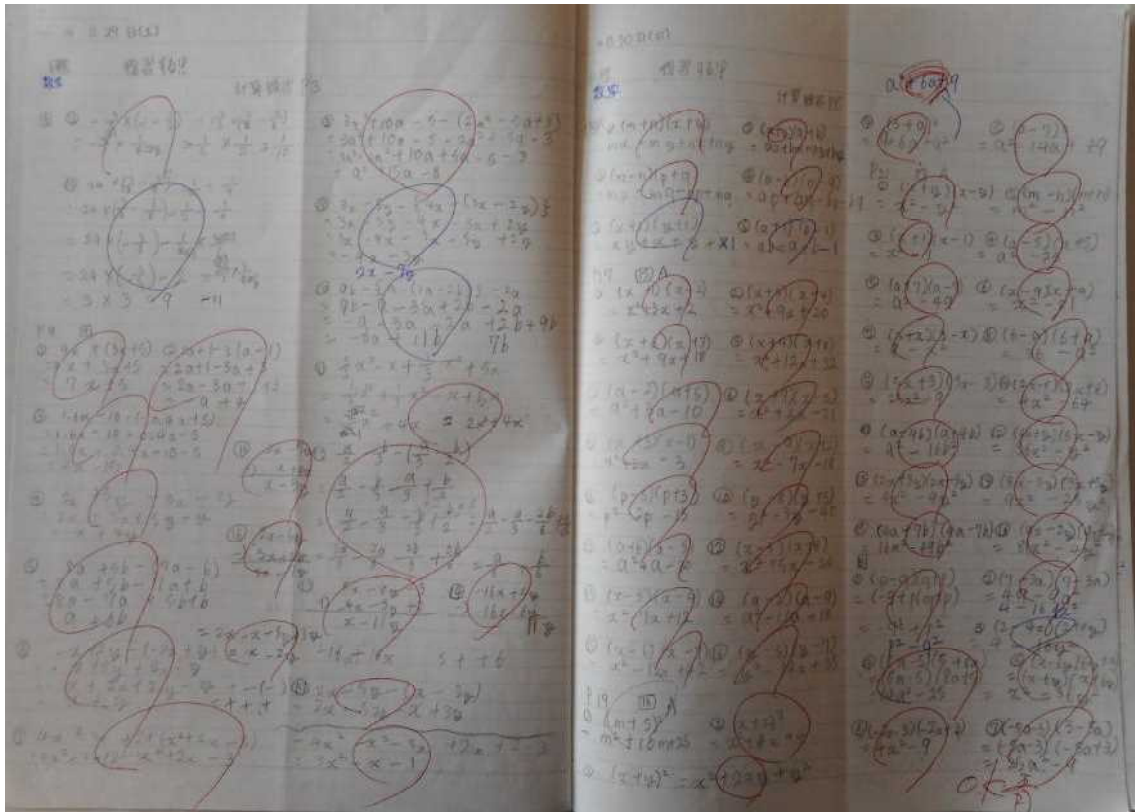
(2) 校内研修について

学校教育目標の具現化のために、全体研究計画を作成しそれをもとに、各教科ごとに「教科経営案」を設定している。各教科ごとに、要請訪問を実施し指導主事の指導を受けたり、県版学力テストの分析結果やアンケートを利用したりするなどPDCAサイクルのもと、授業改善を図っている。

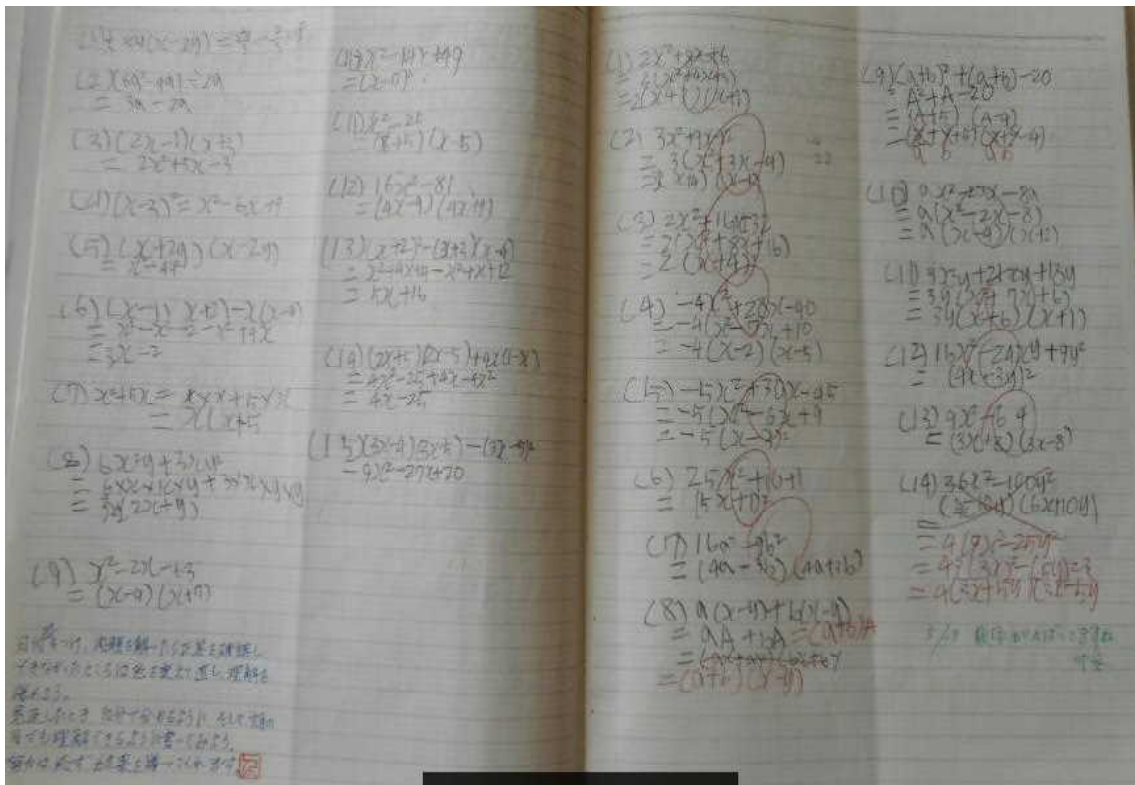
また、他校の公開研究会や教育センターなどの諸講座にも年間を通して参加し、研修を行っている。

(3) 家庭学習について

家庭学習では、「1人学習ノート」という自主学習を行っている。自分で課題を見つけて、それを解決するという「自分で自分を育てる」というスタイルをとっている。小学校から継続して行っている。また、チェックは、管理職、学年担当、部活動顧問、学級担任が行い、様々な教師が関わっている。



A4ノートを半分に折り、1日1ページ分



内容についてアドバイスが記入されている

先進県（秋田県大仙市平和中学校）視察報告書

相馬市立中村第一中学校 寶 伸一

1 視察校の概要

視察した平和中学校は、大仙市のほぼ中央に位置し、生徒数103名（3学級）の規模である。中学校区にある神岡小学校と連携し、行政機関と園・学校による神岡地域連絡協議会という組織を固め、「大仙教育メソッド」を推進し、学校教育の活性化を図っている。

特色としては、校訓「在平素」の下、防災教育を柱に据え、保護者や地域一体となった体験的な活動や確かな学力向上を目指している。



2 視察の内容

【6月26日（月）】大仙市教育委員会を訪問

大仙市教育委員会の説明を受ける。埼玉県日高市教育委員会と意見交流

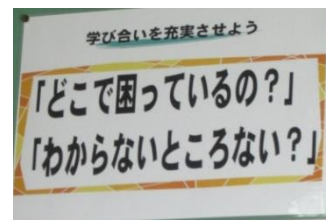
大仙市は、大災害、社会や経済状況、少子高齢化などの実態把握から課題を明確にし、平成19年に「だいせんビジョン」を策定した。平成28年度には地域活性化に寄与できる人材とその能力を伸ばす教育として「大仙教育メソッド」を立ち上げた。キーワードとして、「共」「造」「考」「開」を掲げ、三つの力（「基礎となる力」「学ぶ力」「活かす力」）を校長の経営感覚を生かしながら中学校区毎の方向を示し、目指す子ども像に迫る手法を「大仙教育メソッド」と捉え取り組んでいる。

特に、「学ぶ力」では、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、子どもたちの好奇心を揺さぶり、「なぜ」「どうして」が飛び交う授業が展開する**探求型授業**に取り組んでいる。

キーワードの「考」え、**活かす力の育成**では、一人の子どもを複数の目で育てることを大切にし、TT、少人数、小学校で一部教科担任制を取っている。また、教育専門監（県事業）を配置し魅力ある授業を提供している。

また、「開」き、**信頼される学校**では、子どもと親と教師がつながる**一人勉強ノート**で学習習慣の確立を図っている。

全国学力・学習状況調査結果の説明では、大仙市の平均正答率（国数）は、秋田県をすべて上回っている。また、記述式問題の無回答率が秋田県と比べても圧倒的に低い。日頃から、探求型の授業の取り組みの成果だという。課題としては、平日の学習時間と体力・運動能力運動習慣の平均値がやや低いことがあげられている。



【6月27日（火）】学校説明と全校集会による歓迎、防災学習の説明、授業自由参観

(千田校長先生の説明)

・「あいさつ」「返事」「起立」「発言」「整理整頓」は徹底している。当たり前なことを当たり前にする、させることが大切である。

・不登校が昨年から0人である。地域交流が熱く、小学校、中学校、保護者、地域、自治体などみんなで児童生徒を見ている。

・全国学力・学習状況調査結果は、1、2年生にも実施させている。小中連携で小学校から中学校までの変容をデータ化している。

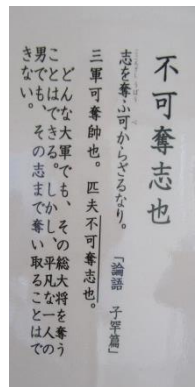
(全校集会・防災学習)

・学校説明が終わると、全校集会で生徒への紹介があった。まず、全校での先生方一人一人へのエールで始まり、全力校歌でおもてなしを受ける。

・生徒主体の取り組みが多く、学校経営の柱に据えている「防災学習」の説明があった。毎年、地域、保護者と連携して避難所開設訓練の説明があった。多くの人と関わることによって、生命尊重や思いやりの心を育て心の教育を行っているという。



・廊下の壁や掲示板など至る所に、生徒の作品など掲示物の多さに驚いた。パソコン部が主になって行事の写真を作成したり、在校生や卒業生の活躍、漢詩、偉人、スポーツ選手の名言なども数多く掲示されている。また、体力テストの個人成績なども掲示している。



【6月28日(水)】神岡小学校視察と授業研究

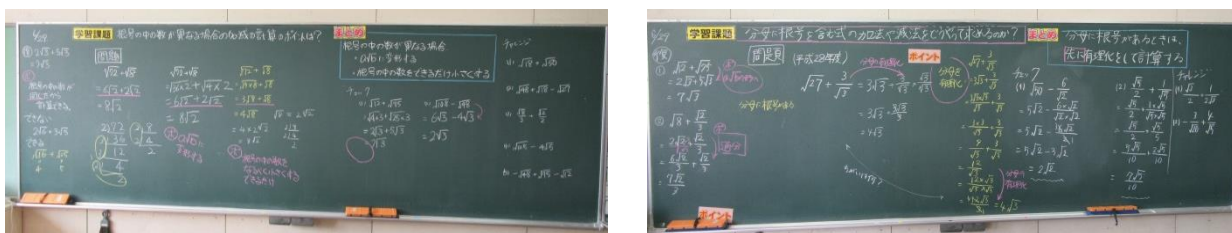
午前中は、神岡小学校を訪問した。驚いたのは、小学1年生からA4ノートを使用し、授業の展開、板書、ノートの取り方が中学校と統一してあることだった。中学校の先生は、小学校で学びの基礎スタイルをしっかり身につけて入学してくるため、授業に取り組みやすいという。



は、中学校に戻り、数学科の先生と教育専門監の先生を交えて、教育専門監から提案があった「授業プランシート」を元に、探求型の授業研究を行った。

【6月29日（木）】研究授業

5人の先生がTTとして、2時間、授業を行った。名前も実態もわからなく手探り状態だったが、5人の先生方で役割を決め、子どもの思考にそって流れを準備した。しかし、意外に計算に時間がかかり、適応問題までできなかった。しかし、授業を研究し、実際に授業を行ったことで、探求型授業のヒントを得たと思う。



【6月30日（金）】教育専門監が入った授業参観

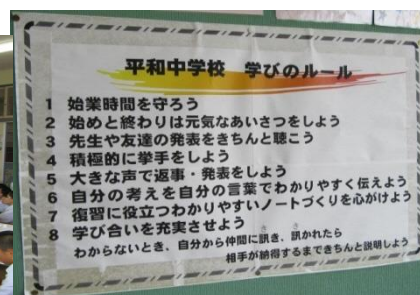
毎週金曜日に教育専門監が入った授業を行っている。1校時目に打ち合わせの時間があり、その様子を拝見させてもらおうと「これをやったら、生徒はこういう反応をするのでは？」などと教師側が楽しそうに打ち合わせを行っていた。また、前週の授業の写真などを用いて、授業の反省やアドバイスも行い、短い打ち合わせの中でも、効率よく時間を使っていた。休み時間や給食の時間に、生徒達に話を聞くと、教育専門監の先生が入った授業がおもしろいという。授業では、生徒の思考を揺さぶり、時には席を立たせたり、間違った方向に進み、それに気づく生徒からの発言を待ったり、教室の空間を自由自在に効率よく利用し、TTの掛け合いも大変勉強になった。



3 視察の成果

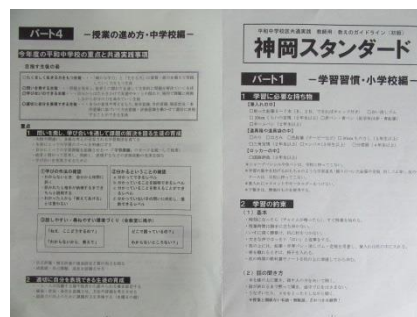
(1) 算数・数学科の授業について【確立した授業スタイル】

- ・授業プランシートを利用し、板書の構成を考え、教師も生徒と同じようにノートづくりをしていた。
- ・小1～中3まで共通して、A4ノートを使用。見開き1ページを1授業でまとめている。
- ・課題設定のスタンスは、①コンパクトでインパクト②課題設定は10分以内③自分にとっての課題にぶつからせる。④まとめは子どもたちから浸透している。
- ・授業が何よりも大切である。授業の中で、自力思考＋交流の場面を持ち、しっかり話し合う、意見交流をやらないと課題解決にならないし、授業で認められることがないと、自尊感情を高めることができない。
- ・問題、課題設定、見通し、自力解決、学び合い、まとめの流れで、TTの複数の目での授業を展開している。見通しの部分で、考え方の道筋を持たせ、自力解決の時間をしっかりと取っている。同じ考え方同士の生徒をグループ（基本4人）で学び合わせ、全体共有では、全員を黒板の前に移動させて、発表させることもあった。自信のない生徒や不安な生徒にもうまくコーディネートしてあえて発表させることもあった。学び合いや発表の聞き方もしっかりと確立されていると感じた。



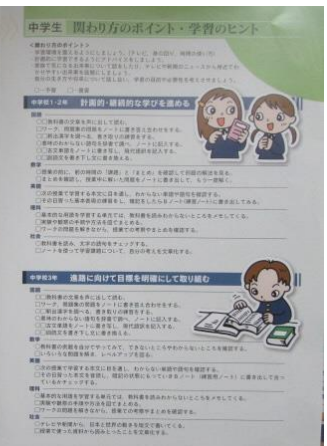
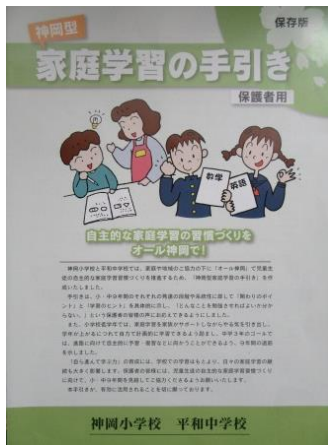
(2) 校内研修について【小中連携した取り組み】

- ・平和中学校学区の共通実践として「神岡スタンダード」という教師用の教えのガイドラインを作成し、学習の約束やノートの使い方、課題解決学習の共通実践など小中連携を意識した取り組みを実施している。
- ・国語が下降気味のため、「神小・平中国語ステップアップ」を取り組んでいる。



(3) 家庭学習について【学校・保護者・地域でも取り組み】

- ・「神岡型家庭学習の手引き」を小中連携作成し、全家庭に配付。家庭や地域の協力を受け、「オール神岡」で児童生徒に9年間の道筋を示し、中3のゴールを見越している。
- ・「一人勉強ノート」は、秋田県全県で取り組んでいる。小1～中3まで実施しているが、親も祖父母の時代から実施しているもので、やるのが当たり前、親と一緒に見るのが当たりの習慣ができています。平和中では、今年から管理職もコメントを書き、管理職、学年、部活動、担任と曜日毎にコメントを書き、励ましているという。
- ・校長自ら「一人勉強ノート」のやり方を4月に3日かけて教え込むこともあるという。



(4) その他

- ・フォローアップシートの作成。(年2回) 全国学力実態調査を自校採点し、陥没点を把握して作成する。1回目で弱かったところを2回目でさらに補充する。
- ・修学旅行の時期も話題になり、校長先生の話では、秋田県では、4月はごくわずか。中学2年時の11月が多いという。

「学びのスタンダード」推進事業にかかる先進県視察報告書

いわき市立勿来第一中学校 中田 仁子

1 視察校の概要（大仙市立平和中学校）

学校規模は、生徒数103名、3学級、校長、教頭、主任補佐、教諭9名、専門監、講師3名の学校である。

校訓「在平素（平素に在り）の下、保護者や地域と一体となった防災教育を学校経営の柱に据え、学校教育目標「たくましく生き抜く力を持ち、一人一人が輝く生徒の育成」を掲げ、その達成を目指している。

2 視察の内容

【6月26日（月）】

○大仙市教育委員会訪問

- ・大仙市教育委員会の学校教育について
- ・学力向上に係る取組について
- ・校内研修活性化について
- ・家庭学習の充実について

【6月27日（火）】 大仙市立平和中学校視察

- 1校時 千田校長先生より秋田県大仙市の取組についての講話
 - 2校時 歓迎集会 全校集会：避難所開設訓練に向けて
 - 3校時 平和中学校の学校経営について（校長先生より）
 - 4校時 2年数学授業参観 「連立方程式の利用」
 - 5校時 2年理科授業参観 「消化について」
 - 6校時 1年理科授業参観 「種子植物の分類について」
- 放課後 授業についての打ち合わせ（数学科担当大友教諭 本道専門監）

【6月28日（水）】 大仙市立神岡小学校、大仙市立平和中学校視察

- 1校時 小学4年生算数授業参観「平行線の作図」
- 2校時 自由参観
- 3校時 小学6年算数授業参観「速さを比べるにはどうすれば良いか」
- 4校時 小学3年算数授業参観「 $17 \div 3$ の計算」
- 5, 6校時 明日の授業実践の打ち合わせ

【6月29日（木）】 平和中学校視察

- 1校時 3年数学「平方根」の授業実践 T1室井教諭 T2赤石教諭
学習課題「根号の中が異なる場合の加減の計算のポイントは？」
- 2校時 授業反省、次時の準備
- 3校時 3年数学「平方根」の授業実践 T1進藤教諭 T2寶教諭、中田
学習課題「分母に根号を含む場合の加減の計算方法は？」

【6月30日（金）】 平和中学校視察

- 1校時 数学科担当大友教諭、本道専門監との打ち合わせ
 - 2校時 3年「平方根」授業参観 「根号を含む複雑な計算のポイントは？」
 - 3校時 1年「文字式の計算」授業参観「文字を含む式の乗除の計算方法は？」
- 3年生によるお別れ会

3 視察の成果

福島県内に広めたい内容

(1) 算数・数学科の授業について

○問題解決のプロセスを重視した探求型の授業スタイル

生徒自らが課題を設定し、自力解決、比較検討、学びあいにより課題を追究し、生徒自らが自分のことばでまとめを行う授業スタイルをすべての小中学校、算数数学科のみならず、すべての教科で行っている。

秋田県の取組はすべて福島県の「授業スタンダード」に記載されている内容とほぼ変わらないことであるが、福島と秋田との大きな違いは、この授業形態を県全体で取り組み全職員が実践している点だと感じた。

○県教委で作成した「授業プランシート」の活用

授業のゴールから逆算した授業設定を行い、ねらいの明確化・具体化を行っている。このシートを作成することで授業を組み立てやすい。

○A4ノートを利用したノート指導

数学では、1時間見開き2ページ使用を基本とし、板書とノートを整合させていた。めあて、見通し、課題解決、まとめ、チェック問題、チャレンジ問題、とパターン化して復習しやすく、参考書となるノート作りを行っている。

小学校からA4ノートを利用し、同じパターンでノート指導を行っている。

(2) 校内研修について

○授業の進め方の共通実践

学習習慣、授業の進め方のスタンダードを作成し、共通実践している。

○校内研修のテーマに「適切に自己表現できる生徒の育成」

問いを発し、他者との関わりを通して主体的に問題を解決する力を育成することを研究テーマとしている。探求型の授業実践を**全教科**で行う研修をしている。

(3) 家庭学習について

○家庭学習の手引きを作成（小中連携）

小学校1年生から家庭学習ノート（一人勉強ノート）に取り組んでいる。学習内容については、家庭学習の手引きを参考に行うが、各自好きな勉強をしている。手引きには、学習のポイントと小学1年から中学までの保護者の関わり方のポイントを記載し、保護者の協力もお願いしている。

○担任、学年教師、部活動顧問、管理職で点検、保護者も巻き込む

小学校では、家庭学習ノートに保護者からも一言記入していただき、保護者も点検する形になっている。小学1年生から家庭学習ノート指導を行い、習慣化を図っている。

中学校では、曜日ごとに点検する教師（担任、学年教師、管理職、部活動顧問）を決め、複数の目で点検、励まし、学習意欲の喚起につなげている。

「在平素・・・平素に在り」

所属校 いわき市立江名中学校 氏名 赤石 大輔

1 視察校の概要

視察校；大仙市立平和中学校（秋田県大仙市神宮寺字荒屋20番地）

生徒数103人，3学級，1年34人，2年34人，3年35人

昭和26年7月 神宮寺町，北檜岡村組合立中学校創設決定

昭和27年4月 同組合立平和中学校開校

創立66年目の学校である。

秋田県の中央部に位置し，中学校区には神岡小学校がある。大仙教育メソッドと題し，三つの力（「基礎となる力」「学ぶ力」「活かす力」）を，校長先生の経営感覚を生かしながら中学校区ごとに方向性を示し，目指す子ども像に迫る手法をとっている。目指す子ども像は「たくましく生きぬく力」と「他を思いやる心」，「社会で役立つ力」をもった生徒である。そのために，今年度は指定校であることから，防災教育を柱に据え，保護者や地域と一体となった体験的な活動を通して豊かな心を育み，その土台の上に志の達成の支えとなる確かな学力の向上を図ることを経営方針に掲げている。

2 視察の内容

【6月26日（月）】～大仙市教育委員会訪問～

大仙市の教育行政の視察および情報交換のため，大仙市教育委員会を訪問した。吉川正一教育長から歓迎のあいさつをいただいた後，教育研究所長より大仙市教育委員会の学校教育について施策の説明をいただいた。学力向上に係る取り組みであったり，校内研修の活性化，家庭学習の充実について，様々なお話を聞くことができた。中でも家庭学習については，最終的に我々は社会に出て自立する人間を育成しているため，その土台作りとして，学び方を自分で学ぶ「一人勉強」の大切さとその方法を小学校1年生のうちからしっかりと身につけさせているということが分かった。

【6月27日（火）】～大仙市立平和中学校訪問（1日目）～

いよいよ現場での本格的な視察となった。まず，校長先生はじめお世話になる先生方にあいさつをした後，全校生徒に紹介および熱烈な歓迎を受けた。その後校長先生より詳しい経営説明をいただき，実際に2年生数学，2年生理科，3年生社会の授業を参観させていただいた。いずれの授業も「課題探求型」の授業であり，生徒が自ら本時の学習課題を作り上げ，その解決に向けて取り組んでいくものであった。その中でやはり教師が実によくコーディネートしている姿が印象的であった。

【6月28日（水）】～大仙市立神岡小学校訪問，平和中学校訪問（2日目）～

午前中に区内の神岡小学校の視察に行った。中学校同様，授業のスタイルが「課題探求型」であり，小中連携がしっかりとされていることが分かった。午後は平和中学校へ戻り，次の日の授業のための授業検討会を行った。せっかく秋田へ来ているので，「課題探求型」の授業を行うべく，課題設定の工夫，めあてとまとめの設定方法を研修した。

【6月29日（木）】～大仙市立平和中学校訪問（3日目）、授業実践～

3年生に対し、1校時に「根号の中の数が異なる加減の計算方法のポイント」を探求する授業、3校時に「分母に根号がある加減の計算方法のポイント」を探求する授業を組み立てた。生徒は一生懸命拙い授業に取り組んでくれて、こちらが本当に勉強させられる授業となった。1授業を組み立てるのに、課題探求型にするには課題設定をいかにふさわしいものにするか、難しさを感じた一日であった。

【6月30日（金）】～大仙市立平和中学校訪問（4日目）～

大仙市教育の骨子である教育専門監による授業を参観した。2校時3年生「根号を含む複雑な計算」の授業、3校時1年生「1次式と数の乗法・除法」の授業で、いずれも生徒の活動がとても見られる授業であった。ある生徒が導き出した解答を別な生徒に説明させる、そのため生徒は様々な思考を巡らす。そしてそれを上手に専門監と担当教員が上手にコーディネートしている。最終日に秋田県教育の集大成を感じることができた授業であった。

3 視察の成果

(1)算数・数学科の授業について

授業は子どもが主役であるため、自分にとっての課題に出合えるよう課題設定の仕方を工夫している。いわゆる課題探求型の授業を展開している。最初の学習課題に興味をもたせるしかけを施し、本時のめあてが生徒から出てくるような学習課題を提示する。学習課題は、この問題を解くためにはどんなことが分かればいいのか、この問題はこれを使って解けるのではないか見通しが持てるものでなくてはならない。そのためには教科書の例題を出すだけでなく、しっかりと練り上げられた教材研究が必要である。

(2)校内研修について

授業を組み立てるうえで、授業プランシートというものを活用している。授業プランシートとは①本時のねらいを達成するために②ねらいを達成した子どもの姿をイメージし、そのための③評価問題を考え、④想定しているまとめになるよう、⑤想定している比較・検討を重ねながら、⑥想定している学習課題・学習のめあてを決め、そのための⑥学習問題を考えることができるよう仕組まれたものである。このシートを毎時間書かないまでも頭に構想して教材研究を行っている。

(3)家庭学習について

自主学習ノートを徹底している。秋田では「一人勉強ノート」というが、学び方を自分で学ばせるため、小学校1年生のうちからやるのが当たり前として取り組ませている。また、意欲を喚起するためにノートは担任だけでなく、学年、部活動顧問、管理職までが見る工夫をしておき、コメントを書くなどして成就感も味わわせている。

4 最後に

生徒は小学校の高学年からA4ノートを使用しているのも特徴的であった。A4ノートはやはり書くスペースが大きいいため、自分の考えを十分に表現することができる。先生方もそれを意識して構造的な板書を作り上げている。このように秋田は「そうすることが当たり前」として様々なことが定着している。訪問させていただいた平和中学校の校訓である、「在平素・・・平素に在り」を感じた先進県視察であった。